

特

8

原亮一君 序文
角藤定憲君 著述
森健吉君

小説
剛膽之書生
全

大阪書肆

大華堂發行

118

小説

栗原亮一君
森健吉君

序文

角藤定憲君著述



田舎書集

全



大阪書肆

大華堂發行

序

角藤定憲君ハ備前岡山の人なり平生ノ志あり故
山を辭して浪華に來り淹留良久しく艱難を冒し
辛苦を嘗めて其志を達せんと欲するも未だ其時
を得ず此頃小説一卷を著はし題して剛膽之書生
と名け書肆之を購ふて印刷に附せんとす君來り
訪ひ余に序を囑す余ハ未だ書中を通覽するに遑
あらずれども其趣意とする所ハ一般に書生とし
て艱難辛苦の必要なるを知り志を立るよハ剛膽
ならざる可ざるを悟らしむるに在る者の如し君
ハ尙ほ青年の士なり是よりして益々深く學を講

俗を矯め人心を正すに於て小説の効も亦大なる者なり故に西洋よて小説ハ文學上一科の専門と爲れり近來ハ日本よても小説の流行盛んなり君も今此流行の間よ立ち共に其文華を競ハんとす嗟君も亦た剛膽之書生なる哉

明治二十一年八月

東瀛仙史撰

剛膽之書生序

近頃小説家を以て自任する輩恰も笥時の笥と同一般雨一日より頭角を出し而して其著述する所を視ると未だ眞の小説を以て遇するものハ落々として曉星のみ是れ畢竟老るに著家が人情の蘊奥を叩かざるに職因せざんばあらざ抑も小説の機能を要するに勸善懲惡を主とするものなれば其立案の如何に依りて大ニ世益あると却つて社會を毒する者とあるは亦た免るべくもあらざ予輩親友角藤定憲氏は當時操觚の人よあらざと雖ども大ニ小説改良に熱心なる人よして先づ隗よ

りの寐言に倣ひ茲年六月始免て稿を起し今や漸く成つて剛膽之書生と号す其文章艷麗からざと雖ども立案の如きは所謂拔戟成隊別よ一機軸と爲したる者にして誠や儒生の目醒したるに背かざ之れを一讀して未だ眠りを覺さざる者ハ則ち長眠泉下の御客たるのみ而して予をして之れに序せよと予亦た辭せんや聊か小言を以て爲すと爾り

明治廿一年八月於中之島自由亭

九州兵兒

森

健

吉

剛膽之書生目錄

第壹回

二少年時事に感じて志を誓ふ
一慈父簡言を吐いて教を垂る

第貳回

酒樓他人を罵る無頼生
絃妓愛情を通ずる敬慕心

第三回

有志の美譽も失敗す貸資生
橋上の獨語は媒介す嬌美人

第四回

絃妓密かに愛慕の人に贈る學資を計畫す
書生頻る手紙の中より出る手形に驚嘆す

第五回

淺草街に客を待て美人に邂逅す書生の車夫
料理亭又酒を得て主人に固辭す剛膽の書生

第六回

滑稽な演説する二階の上書生喧しく辨を振ふ
往事を回顧すれば二年餘り才子頻に憤を遺ふ

第七回

妓樓の女主謀つて不正の計畫を爲す
節妓の困難却つて紳士の情義を受く

第八回

一葉の新聞雜報妙功あり佳人知り得たり愛郎の所在
兩對の才子佳人奇遇あり一座語り得たり愉快の會席

第九回

錦衣を着て悠々故山を望む剛勝の書生の名譽は高し
球燈を點じて燈々門前に連り祝詞の演説喝采も終る

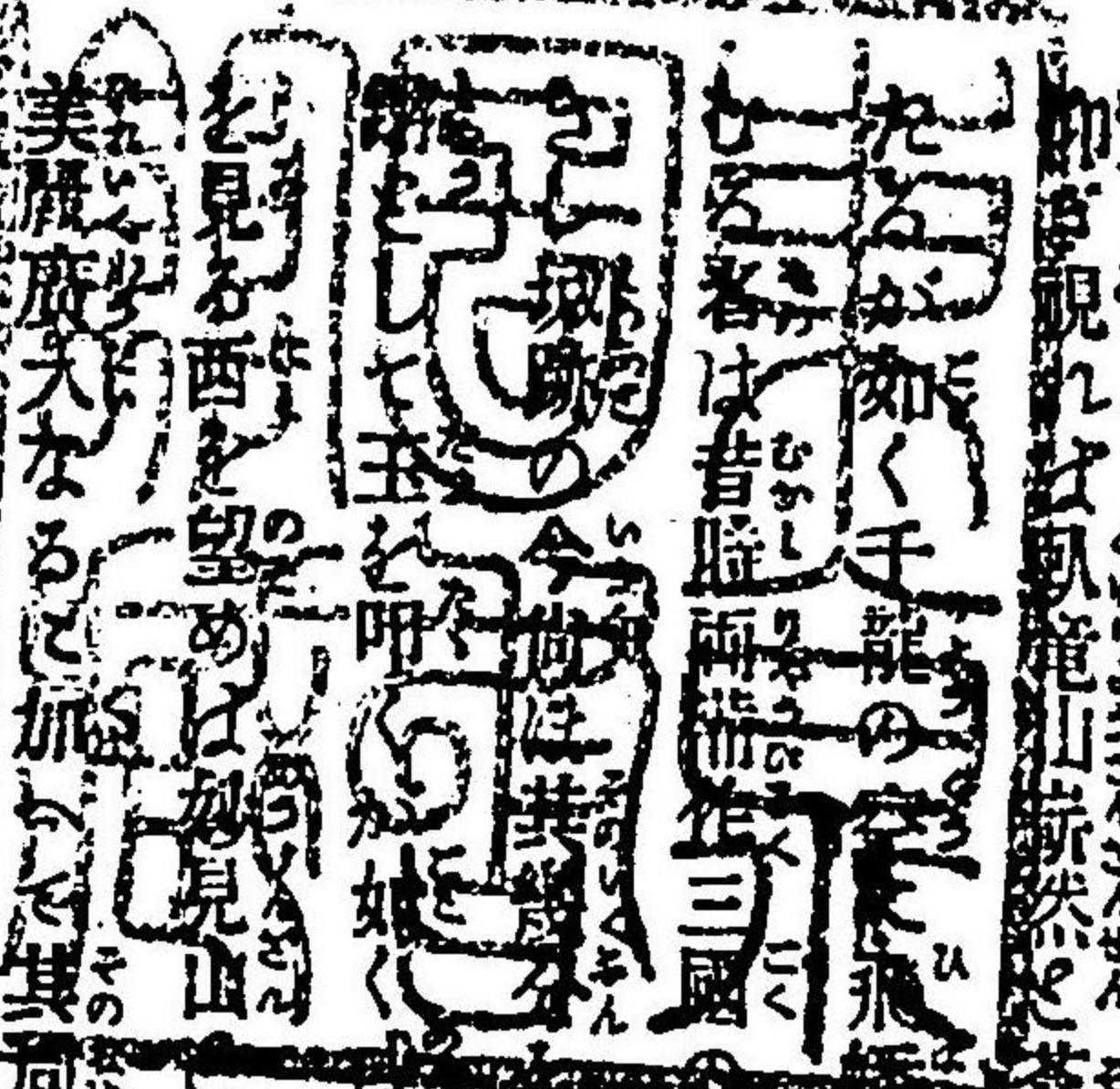
(以上)

岡朋之書生

第三回

角藤定憲著述

806



仰る如く千龍の飛龍... 大守浮田氏の爲めに亡滅の恨を呑みし松田左近將監元成氏が築
存して玉松城と呼ぶものにぞある下を眺れば一帶の清流水聲鏗
其ひは輕風の涼する所を澄澹たる玉波は靜かに起つて川岸を洗ふ
其見を西を望めば妙見山として其頂上又は神靈赫灼たる妙見宮の殿閣あるを拜すべし殿閣の
美麗廣大なるに加へて其周圍は數百株の櫻樹を樹附け更に一倍の風景をぞ添ける南は御座
茶屋と云る有名なる躑躅園にして數百の躑躅花は既に老ひて無情を歎つかと思はる抑も此の
觀をして一時に眸中に集め視る所は金陵山岡山城を去ると北へ五里金川驛に於ける觀波橋
の橋上に在つて左顧右眎して得る景色とこそ知られたり橋や加茂川の南北に架す其構造製
作は純然たる木製と雖も橋欄橋柱は精巧にして且つ長大なるは其狀大龍の水を呑むが如

この橋を評するに適切な語ならん手頃しも六月の末旬なれば炎帝も頻りに熱を吐くが故に人は皆な暑氣に苦しませざるもの無し左れば毎年の例とて金川市街の老若男女又少しく隔たりたる處の村人等は夕方より必ず加茂川の流に涼舟を浮べ晝の暑熱を忘れて別世界と誇るは常なれども分けて今日は何事にてやあるならん夕方より多くの男女平生よりも美服を着け酒肴行厨各々携へ續々涼舟に出懸たり左れを暫時は静にして餘り音も無かりしが大火將に山に入るの間餘とも言ふ頃に至れば益々涼客の増し來り飲みたる酒は四肢に流り渡りて虹の如く辨慶の火事見舞と言ふ様なる人物から追々と騒ぎ出せり先其の略評を記さんに船中棹を叩ひて詩を賦し梶を振つて鈿舞を爲すは之れ書生の醉客なり左祖在揚只目を開閉つかせケツプーと苦しみ居るは之れ無雅の醉漢ならん或は妙妓を携へ眩を命じ自から鼓して擬粹者を氣取るは之れ放蕩遊仙の醉客なり或は酒は飲めども醉はず歌ひもせざれば舞ひも爲す只水を眺めて人の身はと歎ち頻りに他の騷客を批難するは一種變的結先生の醉客にやわらん其他笑語、歡聲、醜音、罵詈、登る船あれば下る舸あり往來上下、舳突、舳聲、相嘲んで滿川殆んど水を見すと云ふ計りなる光景にて騷喧言ふ可からず斯る景色は目にたも止めず遙か上流の堤の上に獨り座を占め一心に釣を垂れ居る一少年あり其少年の容貌姿勢の兼て自から熱さを凌ぐ爲めに編笠をば戴きをれば之れが爲め確と見別くる事の難かりしが今は早や日も西の山端に藏れ炎帝の怒りも次第に衰へつ、臥龍風の送り來て濡れたる背の汗も乾くてふ時に至りしかば今この少年は戴きたる編笠に手を懸け靜かにこれを脱ぎ捨て、其傍の石の上に置き初めて顯す容貌顔姿、年の頃は十八九位と覺しく顔色少し淺黒しと雖も眼光の鋭き人を射る計り鼻隆く口元能く締りありて愛嬌溢る、が如く嚴然として起ち四方を觀る様は之れ亦當世の好男子に背かず其時少年は何か獨りで笑ひながら少年「ア、大層涼しく成つて來たこれで苦凌だ……………ドウモ笠を戴て居たから頭痛がする……………脳病にでもなつたら大變だ……………總て物を直接に頭顱に觸れしむるのは不可……………だけれども魚釣に蝙蝠傘もアハ……………編笠の止むを得ずだ……………實に人間程得手勝手な者は無い今先さ迄は一日の熱を凌がし呉れたる編笠をばモウ涼くなつた

に用ひらる、時あるも又世に捨てらる、事が………ナニ畢竟編笠の如き物の時代後れの長物で今日の如く日新文明珍器器械の續々出て人目を愕かす時に當つて、或る場合の外は用ひ方が無いから捨てらる、も………然し人間でも其通りだな昔日の様な考へでは仕方がない恰ど僕が編笠を捨てたと同一だ世間が捨て、頓着する者が無いに相違ない………何んでも當時は文學技藝の競争世界であるから眞又優勝劣敗だ………僕も世間に捨てられぬ様な人物又成り度が………近來逼塞して學資が………マと言つて僅か尋常中學校を卒業成し得た計りでは………中々文學を以て社會に見ゆること………ア、如何かして學資が………嗚呼々々

ト歎する聲も口の内早薄暮さ頃となりしかば釣糸を竿にクル〜と巻き付けながら傍の魚籠を取り上げ二三度動かし見て又も口を開いて獨言

少年「コウト今日は大分獲物があつたけれどもアノ倦情を催ふした時若し歸て仕舞たら中々此魚は得られない………僕が未だ入校して居た際に毎朝校長が授業前に一度づ、耐忍説を立て、世の間に耐忍を成さぬ人は一世中到底我が欲して居る目的を達することは出来ない今日一事一業を成したる人物は皆耐忍力の結果であるから諸君も第一に之れを耐忍で置れ度いと五月蠅はと言れたことがあるが誠に確實なる言葉で………假令學資の無さにもせよ剛膽と耐忍とを以てせば何をか爲し得ざることもやある………オ、モウ歸らう〜」

ト二三歩を進めたる後の方より同じ様なる美少年発音させじと振り足差足歩み來りて唐突に「チイ須野君………」

ト大喝一聲にて呼ばれば此方の美少年思はず後を振り返りて莞爾一笑

須野「ヤア誰かと思つたら河村君………君、何時の間に出版に實に愕いたが………君も矢張り釣に來たのだな

河村「ソウダ僕も矢張り釣に來たのだが………コレ見玉へ釣の先生は又格別だらうが子………須野「成程澤山に………君は中々釣魚が上手だとの評があるが無理では無な………而

かし君太公望は直針を以て文王を釣つたが君の上手と雖も之には一步を譲るだらう

譲らざるを得たが聊か其轍を踏で僕も通常の釣を

須野「イヤ分つゝ氷解……君の伯父君が學務課長たのを忘れて……實に失敬を吐いてマア怒し玉へ君、今僕が訛傳だと言つたを憤つて……」

河村「ナニ憤るなんのソッな小さい度量でないから失敬も屁痴魔も入らない……實は君の推察通り二三日前出陣した序に一寸伯父の宅に立寄つて學資の件を依頼んで見た所ろがイヤハヤ何處も同じ秋の夕暮ナフ文句じやないが一体僕の親族は皆貧乏家ばかりで少しく頼みあると考へ、伯父の懷中も僕に貸與する金があると言ふ場合の騒ぎではなく大變の負債をして居る様子だから到底此の話しは行はれず聊か失望して歸らうとする時伯父が初めて言ふには貴様の其熱心を冷すのは誠に残念で堪へぬ故に内々ながら知らして遣るが今度岡山縣立法律學校にて初めて貸資生を十五名募集する風説否之れハ信説で其十五名の資本ハ當地の杉本石太郎が一人で支辨する筈だから何れ此の事ハ其當時に至つて廣告するだらうが貴様も後日杉本氏の爲に暫時束縛を厭はなければ己れが特別又頼んで遣るとの話しに僕も心の内で後日の束縛ハ聊か厭ふ所ろだと思へど能く考へて見るに後の兎に角此時を措ては所詮無資でハ自分の目的を達することは六ヶ敷と斷念して宜敷頼むと言ふ序でに失敬ながら君も賛成だらうと思つてその事も一々伯父に談じたら善し夫れハ承知したと呑込んで不日沙汰をすると言て呉れたから歸宅したのだが夫から情々考へて見るに僕は自己の心に問ひ自己の心に答へて其事を頼んだのだけれ君が心の如何であるやら只平生法律を研究するの約束且入學の事まで談じて居たけれども他人より貸資の事に至つてハ又君が後日の事を慮つて相當の決心もあるものを左りとは一應の相談もなく如何にも輕舉の事を爲たりと實は君の心を計り兼て心配して居るが……若し君が不賛成なれば伯父へ此事を報知せて服手に計らふた罪を君に謝する心算だが君の考への如何かナア……」

須野「ドウモ君の厚意は僕は決して忘れない……僕は平素口には言ハねど誰か此の舉を成すの有志者は出て來ぬかと早時の雷雨、暗黒世界の明主、と一般の思ひを成して待つて居た所だ……流石は縣下一流の人物だけで杉本氏は驚いた事を爲るから益々感心だ……ドウモ君宜敷願ふから……ナニ後日の事は又後日の風が吹く何しろ此……ア、君は實に敬愛すべし僕の……」

親友である君が若し普通一般の人であつたら今僕の感ずる喜びは僕の精神に得ることは

……ア、君、僕は死ぬるとも君の如き友愛の厚き精神の敬慕すべき人は忘れない
ト須野は大いに喜びて其厚意を謝しければ河村も安心ふし夫れより両少年は此の事につき

色々前後の話を爲しながら我家を差して歸りけるが早くも須野の表門になりければ
須野「チ、モウ僕の宅だ……君一寸寄つて話して歸り玉へ……家内が心配するか

ら一旦歸つて來るとかそれなら君失敬……必ず今のを願つて置ぞ……承知して
居る……ナ、僕が變心する様なことが有るもんか失敬々々

ト須野は河村に別れて直ぐと我家に入り母上只今歸りましたト言つ、竿を仕舞ひ魚籠を其
場に置き見れば母より外にも居らぬ様子なれば

須野「母上只今歸りました……アノ父上や弟は何處かへ……
母「チ、憲一郎かマア遅いこと大層根氣が強いなア……マア、仰山釣れたこと面

してお前の歸りが遅いから親爺さんと環が迎ひに……そんならお前は逢はなかつた
のだなア……モウお歸りなされる時分も足を洗ふて上るがよい……チ、それ

く今日お前が出たわどへアノ河村の長さんが尋ねて來られたよ
憲「へい左様でしたか私も釣場で逢ひましてそれから今門まで一所に歸りました所で

す……
母「ソレの大きに善い都合で在つたなア……長さんが言ふのに何でも今日中に憲さん

に逢はねばならぬ事があると仰山らしう言ふて居られたが何の事であつたのだへ
憲「イヤ別の事では在りませんが法律學校の事でした……へいイヤ貸資生の募集が

あるので……へいアノ河村の伯父さんが學務課長ですから……へい伯父から聞
いて一所は頼んで置いたと知らして呉れました……左様です誠に親切な人で私しの

爲めには良友です……ハイモウ仕舞つて上りませう
ト母子が話しの中はへ表よりヤレ、と云ひつ、父の龍寛が次男の環を連れて歸り來たり

憲一郎が今釣り歸りたる魚を他の皿鉢へ移し換ゆるを見てニコ、と笑ひながら
父「今貴様を迎ひに往て見たければ道が行違つたか途中でも逢はず川迄往て見たれども

一句も形見……
村の宅にでも遊んで居るだらうと廻つて見たれば悴の長

之助が歸つて来てモウ憲さんは宅へ歸つて居ると言たので今歸つたが今日は大變釣がわつた様なア……

憲「父上誠に御心配を懸けまして恐れ入りました……今日は能く釣れますのでッヒ遅く成ましたのと又河村に逢まして少々談示に實が入り格別遅く歸りましたので……

父「その話しは一寸河村の方で今先き聞いて来たが實に結構である……マア足を洗はない先きに氣の毒でも一走り御苦勞ナ……

ト父の言葉に憲一郎ハイと答えて自から酒屋に到り聊の酒を求め來りて夫れより何呉れもなく夕飯の調度を母に力を添へて爲しつ、父に進むれば父は大いに満足の色を顯はし釣り來たる魚を肴に一酌を催はし又母も弟も自分も一同に夕餐を喫了ければ父は靜かに憲一郎に諭して言へる様

父「今改めて言ふでは無いが貴様の性質を視るにドウモ物に倦厭する弊がある様に思はる、が人間がその倦厭の情を起すのが第一に業を成し事を行なふの障害物であるから以

來少しく猛省せねばならぬぞ夫から此度の事が都合宜く往たら一意専念途中に於て決して彼の鄭の鄙人の蓋に倣ふて貫ふてはならぬ如何な苦辛を嘗めても不撓不屈と云ふ剛膽

と耐忍が緊要であるから決して之れを忘れない様に一日も早く名を揚げ此の廢たれたる須野家と興して貫ひ度い

どの言葉に憲一郎は疊に頭をすり付けて自今此の御教諭を憲一郎が肝に銘じて時々複誦致しますとの言葉の下より最と古びたる柱時計の音鏘々と七時をぞ報じける

第二回

光陰に關守なく昨日と過ぎ今日と往き鏤金の如き大夏も早く去り秋籜身に染みて滿山錦繡を織り出す九月の中央をる金川原芳樓の奥二階に二人の少年二人の遊妓を呼び寄せつ、一寸先は暗の夜の後前見すの大愉快一人は佛蘭西形の絨織地なる洋服に金時計をば是れ觀よと言ひぬ計りに胸先きに閃めかし今一人ハ米澤の裕に黒縮緬の三ツ紋付きたる羽織を着流し筑前博多上等の帯を締め之れも同じく時計を帯の間に挿み居る風体ハ確かに金満家の息子なるべし左りながら兩人とも容貌の醜なるハ無類飛切と言ふ品物なれども衣類の美麗なを着けたる方の少年いさ飲み乾たる盃を和服の

少年に献しながら

洋服少年「西君失敬……………ナイ小龍酌を仕ないか……………ねへ西君、小龍も品吉も近頃心經病だと世間に評判が高いが其原因の由て来る所を研究しなければならぬ」

西「然り、君の説の如く其原因を探究せすんばあるべからずだが僕は既に之れを探究して居るから恐ろ韓信の股潜りだらう……………ナニ小龍と品吉の病は扁鵲でも偏知己でも癒ないヤツであるが岡山まで行くと言ふ中々妙な病氣だと……………イヤ、明白に言ッたら両妓が憤るかも知れないから江馬君に後日密とアハハハハ、

江馬「アハハ、岡山へ行けば全快すると言たので一切合切病源が判然したからモウ君の密告は無用ダヨ……………所が君世の中ハ廣いチエあんな貧穴家で意苦地なしを戀ひ焦れて神経病を起す者があるとは……………實に笑ふ可しだテ

西「イヤハヤ君の神宗坊主を見た様に悟りが早いから中々妙だ……………ソリヤ君、色は思案の外と言ふ事があるからねへアンナ貧穴先生で僅かに貧窟生に甘んじて居る卑屈ものでも好く者があるのだよソコが所謂の造物主の靈妙サ

ト自分等が金満を鼻に掛て他人を誹る傲慢無禮品吉小龍の両妓は心の裡にて我が最愛の意中の人を卑屈と呼び貧穴家と誹るも多惡い人と思へども流石お客と言ふ名に免じ故と互ひに愛嬌好く片頬に笑を含みつ、

小童「旦那様方の戯談計りソソナ事がありますものか……………妾等には一向何の事やら一寸とも分りませんよチエ品吉姉はん
品吉「ハア妾等の様な愚痴な者に、旦那様の御談しなるとは一向分らないからチエ小龍はん

西「何にソソナニ愚痴だなどと言なくても貴様達は藝妓でこそわれ中々學者じやないか……………イヤ、小龍も品吉も大層學者で議論家だと言ふ説があるから蔽した所が仕方がないチエ江馬君どうだらう

江馬「ヒヤ、君の説の通り……………所でアノ件は如何したもんだらうか……………ナニ十日や十五日休んだ所が構ふ事はないが此事が自然校長に知れると都合が悪い……………チエ品吉でも小龍が回つて苦しく成て來たから……………

でもソナ妙な顔計りせずと三弦を弾くべしマ……
 ト矢鱈に饒舌散らす折柄妙覺寺の火事梵鐘の響鎗々と鳴り渡れば市街遽か又騒然と東西に疾走する人々恰かも戦争場の如く其雑踏言ふべくもあらず左れば原芳樓上に於ける二少年は驚くと大方ならせ今まで酔ひし酒の一時に醒め果て火事は何處だと慌てつゝ、二階を下んとする所へ當樓の乾娘が飛んで来て

仲居「アノ大變です西様の御近處が火元ですからドウ目那……ト言捨て走去りければ西はこの言葉に一層膽を打潰し江馬君どうか来て呉れ賜へど共々打連れ一散に火事場の方へ赴きたり跡に両妓の顔見合せホット一息吐きたる後

品吉「小龍はん火事でも妾等の氣樂だ子エ離れた所に家があるから……
 小竜「然サ此様な時に氣樂なもんだが……夫はそうと子エ品吉さん同じ書生でも須の字や河の字とは大變な相違だヨ……須の字や河の字はドウしても……

品吉「サア今頃の無勉強最中だらうが一度會つて顔が見たい子エ
 小竜「顔を見るにも中々見られる事が出来ないが……貴妓は河の字と如何な約定を爲て居るノ……何を言つた所が二人計りで憚る者はないは子エ

品吉「ソウ問はれると答へる言葉に困るが實はソレ何時ぞや此二階で中學校を卒業した人々が懇親會を爲つたことがあつたらう……サア其時初めて此の人ならと思つたのが病付さだけれども妾し計りがソウ思つても先方は少しも感じ無いので……素よりアノ人の評判を聞いて居るから他人の様に妾の肉交を欲るのではない只アノ様な有爲人と情交を結んで見たいのが山々なれと未だアノ人に願つても見ず自分獨りで恍れて居るとは自分で自分が耻かしい様だが仕方がない何位に思ふまいと思つても然う思ふ程慕ひしくなるのでホントニ辛氣臭のァハハハハ、火事だと騒いで居る最中に斯な話しを仕てから可笑い子エ

小竜「アア貴妓も其時に……妙だ子エ恰と妾も其時酌取りに雇はれて居てからソレ須の字を思ひ染めヲホハハ、思ひ染めたなんのと言と素人の娘らしいが……妾も此方計りの片思ひで仕様が無いけれど何時か念が届くであらうと夫れ丈けを樂みにして暮して居るのだが巨入て遊夜家裏で在ながら何も妙での有ませんか戀しいなんて……

品吉「チヨット御覽モウ火事も鎖つた様だヨ………チヤモウ消防夫が歸つて来るよ
ト両妓の街道を眺めて居りしが火事に往たる人夫等は口々に

甲助「ナイ乙助ヨ……アンナ貧乏人の宅が焼けて仕舞とは可憐想じやないか………己ら
ア彼の宅がこの後どうするかと思へば他人ながら氣の毒だよ

乙助「可憐想だが仕方がないッレ運の強いのは西の家じやないか隣りから火が出て東側
の隣りの焼けたのにアノ家へ火が付かぬとは……運の強い家だのウ………

丙木「アンナ奴の宅こそ焼けても能いや………金を貯る程持ながら貧乏人に一銭も恤む
こと知らず只取り込む事ばかりを知つて居るのだから………

丁吉「西の親爺の様な慾張りにはホントニあるものじやア無へ出す事なら棺桶を出すのでも
厭がり取ることなら石地蔵の胸倉でも取ると言ふ奴だ一夫に親に似た殿の子で息子の萬

太郎奴も同じ様な氣質で若旦那々々ど人が言つて遣ると善い氣になつて人を二束三文と
も念のぬ傲慢な奴だ一

戊平「彼奴は法律を學んで代言人か裁判官にでも成る心算知らん岡山の法學校とかへア
ノッレ矢張り慾張家の江馬の息子廣太郎と一所に入つて居るさうだが彼様な奴が代言人

や裁判の役人に成る事は出来まいぞ………
○「然じや〜勉強すると言ふのは口計りで岡山でも女狙ひや青樓遊をしてから一向意

情者だとの評判だ一その上近頃は病氣だと言つて歸つて居るが………
△「今日火事場で西の息子と江馬の息子が自分等の消防には手も出さず頻りに人に喧ま

しく言つて居ると平生悪まれて居る者だから誰か後ろから来て兩人のト頭をコントお見
舞申した者が在つたがその時は善い氣味であつたのう

□「ナニ一ツや二ツのボンコツでは感じが無い悪まれた子の頭堅しと言ふ事があるから寧ろ
そわんな生意氣な子は手も足も動かぬ様に仕て置けば善いノダ一

十「コリヤ〜そんな悪口を止めて後ろを見い親類の奴が走つて来るぞ止んか〜
ト消防の爲に往きて歸る途皆々悪口をはきつ、歩みしが後より西家の親族某が來りしとて

遽かに話を他へ轉しけり之れを聞きたる二階の藝妓の互ひ又顔を見合せツ、
小竜「品吉さんアを聞くと誰の心も同様です子エ

品声「ホントユ……併し何時だろうと言ふ折から下より小竜はん品吉さんお迎ひ
 記者曰く彼の西、江馬の両少年は當地有名の令滿家なれども餘り兩家の令滿なるに
 へて人情輕薄なる所から小人共の僻として斯くは悪口を爲すものなるべし而して西江
 馬の兩少年は兼て岡山法律學校へ入學し居ると雖ども平生勉強の志至つて薄く放蕩
 學を試みる様子にて近頃も校長の許へは病氣に付歸省治療と胡魔化し四五日前に歸宅
 し偶々原芳樓に登り當地の名妓小童品吉の兩妓を呼び寄せ愉快を盡す眞最中斯く變事
 わりし事と知り玉へかし

第三回

日章の國旗は翻々として旭日と相映じ以て國家の威權と泰平を示し青々たる門松や清淨
 無垢の七五三飾りの幾千代迄も變りなき君が標を祝ふなる明治もこゝに十六年目出度迎ひ
 る初春の岡山城下の景色を言はば高帽禮服の紳士豪商靴音高く往來し鐵手細腰の佳人は三
 々五々と連立ち歩みて多情的野郎の目を眩ます小童の小賢敷くも巡査の目を掠めて風を飛
 ばし少女は優しくも宅に在りて手鞠を弄す其様子差萬態なるが此は西大寺町通の往來を東
 に向ふ二人の若者互ひに辭儀を爲しながら新年の禮を述べて同じ道を連立ちッ、

○「時に君、岡山もこの二三年は大層繁華に成つたではありませんか

△「左様さ第一に三番から京橋際まで港を築き蒸氣船や大船巨船が川崎町邊迄もベタ付
 きと言ふ位の海運が便利に成つた計りでなく當時工事中ではあるが山陽鐵道線路の要衝
 に當つて居るから何にせよ竣工の後には陸運の便利も盛になつて益々當地は繁華に成には
 相違ない……イヤ其話は措いて變つた事を御尋ね申す様ですが貴家も杉本の方には
 聊か御關係があると言ふ事を聞いて居りましたがドンナ御都合になりました……實
 は私の宅も四千圓計りの取引があるのですがアノ様子では到底駄目かと思はれます……
 ……サア僅か一年の間にアノ様に成りますからチエ

○「ダカラ相場に手を出したり大山子は張るものじやアありません……私の方のは
 僅かですから別に心配も致しませんが貴家のは又大層な取引ですから御心配な譯で……
 ……一体大將は宅には居りませんとのことですが左様でせうら
 △「……が東京へ逃て居るとの評で私しも毎度談判に行きますけれども主

人には送はれず番頭が出て話しますから是非主人にと言ひますと他行だと申して一向行先きを申しませんけれど人の説では先づ東京だと申しますが………アノ去年秋頃まで大山子を張つて十五名も書生を募り法律を勉強さすとして自分が一切の費用を負擔して暫時は名を捕め杉本の大層な人物だと他府縣まで其名が轟いたさうですが今その書生の方は如何成つて居りますたらうか矢張その學資だけはあの儘に成つても負擔して居りますのかチエ

○「ナニあれハモウ遠くに駄目になつたので募集生が入學して居たのは儘かに三月計りださうで此度の杉本の破産でモウ學資は送らぬ様になつたから實に失望落膽したさうですが中にも少し資本のある宅は私費にて矢張り入學させたもあるさうですが大方は惜々として退校仕たさうです………ドウモ私共は合點の行かぬ事が澤山あるのでアノ位盛に遣つて居た者が假令商法上に於て三回や四回の失敗を喰たどてあの様になる筈はな

いと思ひますのです

△「其通りですアノは計略かも知れませんが私しも取引上で自然裁判沙汰にも致すころでし

たけれども親爺がアノ通りの人物ですから頻りに止めまして申すにハ裁判を仰ひだ所が取れぬ物は取られぬ道理又アノ人物も尙だ充分見込のある人だから暫時捨置くがよからうとの事ですから其件は今に其儘ですが實に馬鹿な話しです………餘り盛など言つた所が信用を仕過ぎると却つて此様な事件に出逢ひますから浮かり油斷ハ出来ません………イヤモウ此處からお別れ申さねば成りませんが………大さ失敬致しましたドウカ

お暇にお遊びにドウカ御免を………

ト二人の商人が話をなして今別れる其所迄少し後れて歩み來りし少年は此話しを聞しや否やとは知る由なけれども益々東の方又歩み來り西大寺町も打過ぎ早くも朝日川に架りたる京橋の上に成りければこゝに初めて足を止め東手の欄干に身を憑せ居るを見るに十九計りの年格恰其容貌の美なる其風采の儼然たるには似もやらず身には古き袷に古き白木綿の兵兒帯を締め小倉袴を高く着け悄然として今や深邊の時報臺より撞出す鐘の音を一ツ二ツと心の中にて數へながら太息をつきて四方を見れば別に人もあらざるにぞ聲を發して長歎して言………

少年モウ今の鐘は五時ださうな……春とは名のみだ常山にも金山にも雪が梢を埋めて居るア、寒いわ、大變寒い……如何に寒いとも冷さいとも夫れに一向屈せぬがト言ひつ、眼の中を濕ほし悲愁限り無き相貌を現しけるは抑も千里離袖の佳人を想ふて然るか或ひは鹏程萬里に身は孤客と成り時に歸郷奮懐に堪えずして然るか記者未だ知らずと雖も再びこの少年が口を開く時に於て判然たらん乎今ま少年は眼中の涙の漸次に溜り來て果は集つて一球形となりホロリト眼界を去つて鼻の頭に降り懸る時遽かに袖もて之れを拭き去り

少年ア、困つたものだドウ仕たら善いであらう乎……折角杉山氏の貸資の擧があり伯父の周旋で須野と二人都合善く入學してヤレ嬉しやと思ふ間もなく僅かに三月計りの其内に遽かに杉山氏がアノ通りに破産の始末それ故貸資生一同が斷りを言はれた故残念ながら須野と共に退校してからモウ二十日の日數が立つた……其時須野はモウ歸村はせまい東京へなりと行きて假令如何なる辛苦をしても一旦の目的を立てる心算だと言つて其儘別れてから後は一度も會ひぬがモウ上京仕たであらうか……それは善いが

我身の方向は如何に決した物であらう二三日前に委細今回の事情を書して實家へ送つたら今朝返書が來たが……其返書の趣きは既に如斯なる上は其方の考へにて決心すべし此方に於ては残念ながら學資の都合は出來ぬが其代二三年は假令其方が宅に居ずとも差支ないとの御文面であつたが……だから二三年は他人の奴僕となるとも不焼不煎……イヤ〜到底人の奴僕となつては學文する暇が無い……車夫にでも爲つて其儲けたる金を以て糊口に當て學文を爲やうか……逆もこれは言ふ可して行なひれまい残念だが身体がチト彫質から……困つたなア人間が既に甘才にもなつて……併し學資なくして學文をすると言ふのだから困難は困難なる譯だ……何位困難でも何んでも他人と異つて両親を養ひ奉つるの義務者は我より外に無いのだから……何時までも貧苦の内に親を泣か、奉つるは子たる者の道でない……近來は書生を養ふ人が無くなつたので實に……ア、困たナ丈夫たるものが……何に我身の糊口を凌ぐ計りは決して困らないが家を興し着を揚げ両親に孝養を盡さんとせば是非とも學文を成されば假令官途にまれ民間にまれ其目的を達することが出來ぬ……糊口に汲々とし

て居ては又學文が出来ないし……伯父の宅に厄介になるとして學校へ通ふことが出来るよ善いのだけれど夫は父上の手紙に止めてあるから仕方がない……それに第一困るの、今日まで杉山氏の宅に遊び居たけれども今夕からはアノ家に歸ることが出来ぬ朝から債主が来て嚴しい談判で遂に屋敷建物まで悉く債主の手に渡したのだから……ア、男子と雖ども如斯心情的萬緒たる時にはどうも涙が……馬鹿らしいマダ僕は大丈夫の仲間には成れないナこれ位の事に涙を出す様な有様では……兎に角今夕は何家へ泊まつたものであらう……こゝに十二三錢あるから安泊屋へ行かうか知らん……夫なことを爲た所ろが明日はどうしやう……歸つたら近隣へ對しても宛然意苦地が無いのが知れて体裁が善くない……明日は又一考を廻らして……何んだ中島邊は大層弦歌の音がするが新年宴會だナ……人の新年會だの何だのと言つて愉快を極めて居るが我身の如き苦勞ある身却つて弦歌を聞くさへ五月蠅様だ……夫、左様だ到底二三年間の兩親のお顔を拜することが出来無いから遙かに我が靈に兩親の尊顔を承け併せて二三年の缺孝を拜謝して置かなければならん……

ト遙かに形容を改ため遙か西に當る我家に向ひて嚴肅として曰く
嗚呼長之助が兩親と長之助は志を達せん爲めに暫時缺孝を爲すと雖ども幸ひに不孝の罪を宥されんことを……畢竟長之助が精神の一時不孝の名を得るも長く膝下に孝養を以て仕事するの意にあれば……ア、兩親よ今若し長之助が他行をなせば定めて不自由を覺え玉いん……然しながら長之助既に廿歳の春を迎へたれば一日と雖ども安倫を爲して居られぬ時で在りますから……とても他人に依つて事を爲すことは不可です……恰かも這度の様な事で到底他人の助力補給は當にはなりません故に……長之助は自來車夫と成るとも人の奴僕と成るとも寸暇を偷んで汲々學文ヲ注日致し不日志を得んことを豫じめ此處に盟つて置きます……ア、兩親よ幸ひに玉休を大切に裝葛を重ね玉はんことをア、ア、
ト一心不亂に獨言を爲しながら尙漣々として涙を流しける折から來掛る十八九の佳人長之助の傍近くなるや否チャと計りに驚きながら河村様と呼懸けたり

此處は岡山にて最と名高き浮世小路、藝者、幫間の潜居所中にも美しき格子造り間口は二間半ばかり奥行は能く分らねども何しろ小奇麗なる一構へ表口の能く人の目に付易き所へ松本品吉と幅二寸長け五寸位の厚さ板に提灯屋流に書付たり夫より先づ内の間取を見るに臺所は二疊半中の間が六疊敷中庭を隔て、奥に四疊半の座敷あり總て三つ間十三疊と言ふ構造なり彼の奥の四疊半の間には主人にやわらん芳紀は十八九計り容貌を評するも致なれども評記せぬも餘り奥薄ければ左に其大略を記さんに顔の所謂る豊頬皓白又少しく紅を散じ翠黛は新月を畫き明眸の清澄なる恰かも秋の水の如し近頃病氣上りにてやあるならん手鳥羽を欺く頭髮は東京流の嶋田嬢に結びあれども髻髪少しく亂れて眩邊に垂れたる様は一層の艶態を極めたり身には西陣製の御召縮緬の恰に琉球袖の下着を着込み黒縮緬に小さら桔梗の紋付きたる羽織を着流しつ、黒柿の提煙草盆を前に置き長き朱管の煙管に薩摩國府製の煙草を盛で吸ひ居る有様は窃窺と言へん乎艶妖と評せん乎之れ將て月宮の楳嶽にあらすんば龍宮の乙姫にやわらん(若し斯の如きもの有とせば)と疑ふ計り實に一笑城を傾け一泣鬼神を惱殺するに足るべし偕又この美人の前に小さく恰か他より借りて來たる猫の如

く成つて居る少年あり今美人のこの少年に向ひ幾度ともなく何か言はんとしては言ひ兼ねたる風情にて頻りに煙管をポン／＼と打ち吸殻を落しながら尊念して居たりしが今はモウ思ひ切たと言ふ狀にて丹朱の如き唇を動かして雪を欺く様なる皓齒を顯しつ、

美人「アノ河村様最前京橋の上でお目に掛り夫から無理にお連れ申して歸りがけに委細のお話を承まはりましたが誠ににお氣の毒ですチエ……」

河村「ハイどうも致方が在りませんが然しながら品吉さん甚だ濟みませぬねへ別に深いお馴染でもないに遂に御親切に甘へて一夕御役介に成る心算で貴妓又隨て來ましたけれども見れば貴妓の外又人も無いやうですから却つて後で貴妓の爲めに悪くハ在りませぬか知らんと思ひましてドウもお氣毒で……」

品吉「何又ソンの御心配には及びませぬ實は御存知の通り妾には只一人の母がおりますけれども今では妾の姉が引受けて世話を致して呉れますからホンの妾ひとりです……」
 エまだ此處へ來てから僅か一月半にならぬのですか今一寸勤めを退て居ますので……」
 北りますもんか……オホ、……可憐想なことを……貴郎に

こそ好美人がオホ……

河村「それでも西君が大層貴妓の事を言て居ましたからです……夫では失敬を申しました子エ

品吉「妾の西様のやうな人へ大嫌いですが……アンナ人で無くても妾の様な三平一満でも世話をしやうと言つて呉れる人が少しは在りますけれど妾は心に望む人があつて其人に假命令を的にしていも御待の下婢になりとも使つて貰ふ者へですからそれ迄と云つたら猫の子でも側へはイエ抱ては兼ね様に謹む心計ですが何分妾計りの片思ひですから辛氣臭さうて……

ト話しながら女性の僻として心弱くも早や少しく眼の中を濕はしけるを見て河村は獨り心中で思ふやう儲蓄妓と言へば矢鱈に浮氣性で人を見れば欺まさうくとするものなるに今品吉の様子を考へるに親切なる所があるのみか思ふ人に添ひ度いから夫れまでは猫の子でも同衾を爲ぬと眞實を現して話すは家業に似合ぬ貞淑の所があるそれに金川に在りし節は何にも意に止めざりしが今能く彼れが容貌を見るに中々絶世の美人であるア、この様

な婦人に念はる、男子は言は「一生の傍伴と言ふものだ」と流石は人情の然る所なるか今日までは婦人なんぞの容姿舉動には目も掛ざりし河村なれども此品吉が優しき心根と美艶なる容貌とには初めて心を動かしかける

河村「成程貴妓の家業にも似合ぬ見上た人です……貴妓の様な美麗な容貌に貴妓の如き優愛なる精神の人に思はる、男子は何如なる侍福者であらうか如何なる好男才子たらうか一度顔が見たい子エ……子エ品吉さん……

品吉「そんなら妾の様な者でも一生懸命に女の道を守り婦徳とやらを潰さなければ妾の思ふ事が叶ふ時がありますだらうか

ト河村の顔を嬉しさに眺め愛嬌溢る、が如き目に秋波を送つて言ひければ

河村「ソリヤ先方の人物次第だが……併し先方が木石的の人物なら折角なる貴妓の深情も届かぬかは知らないけれど普通人情を解する者であれば如何でも其貞淑なる精神を喜ばぬ者があらうぞ然しながら人間へ肉交より情交が貴いと此洋の學者が言つて居るから設りに意氣を解し粹を喜んで先方の精神が如何なであるやら良か悪いかを判断せめて

百年の契を成すの良策でないから……今貴妓の意中の人はドンナ有爲卓絶なる人か
知らないけれど定めて才子に相違なからう……僕が今少しく粹者であれば貴妓の傳情
を其意中の人に告げて以て交際を取持けれども何分御存の如く山出しの武骨ものだから
幫間沙汰は到底六ツヶ敷いアハ……

ト言ふ顔を情々見守る品吉が心の中は千萬無量恰かも潮の湧が如く萬緒亂れたる糸の如し
ア、妾が意中の人どの其様に言はる、貴郎又てあるものを左りどの餘り粹の利ぬことよと
満胸の情愛を知らずに山なき苦しきも若し直接に斯々と打明したる其時はア、藝者なぞの
賤業だけで數多の人に弄觀らる、から自然と面の皮が厚くなり自分の口から猥らなる斯な
事とを言ひ出すかと妾の腹裡が見ぬ故却つて拒愛玉ふべし左れば如何にして我が思ふ心を
知らせ参らすべきや儘ならぬ浮世どの斯る事よと言へばぬに岩手の躑躅それならでいとい
色めく其様の雪に惱める梅の花得も言ひれざる風情なれど河村は我を慕ふと言ふことを夢
にも知らねば何氣なく

河村 品吉さんモウ十一時が鳴つた様ですが失禮ながら一枚蒲團を借して下さ……

イヤ寢床は僕が敷ますから……ハイその御親切は有難う存じます但し僕は節酒會員で
ありますから禁酒ですも其御心配の……斯して若い男女が一軒の家へ寐ますと誰ぞ人
が怪しむことはありますまいか……
品吉 誰が怪しみますものがありませう……若し怪しむ人があつた所が貴郎の御迷惑
でせうが妾は却つて其れが本望でホ……そんなに御心配はいりませんよ妾の中の間
へ寐て進ますから……

ト笑ひながら河村に寢床を延べ與へて其處へ臥さしめ若し感冒でもと思慮しつ、蒲團の前
後を靜かに押へ夫より自分は中の間に來て着たる衣裳を脱ぎて寢衣と着換へ押入の内より
蒲團を出して床と述べランプの心を細くして床の側へセツマリ坐り奥の間を幾度どもなく
眺めては煙草を喫ひア、と一聲口の内又もや奥を眺めては心に畫く屋氣樓ソレを其儘寫し
出せば

ア、何で此様にアノ人が敬慕しいのであらう……藝者稼業をするものが戀しい
の可愛のとして苦勞をすれば人は馬鹿だと思ふであらうが……然し妾しが敬慕ふのは決

して猥卑な心からでは無いアノ才氣と學文とマダ外にアノ人には尊ぶべき精神があるから……この金川で他人に親切あると親に孝行なるとは評判である……故にアノ様な人と情交を結べば西洋人の情交にも劣らぬ愉快なる真情が……ア、夫れにしても今この身の願ひをば無理に遂げたところが……假令尊敬すべき人であるもアノ儘の人では仕方がないドウかして二三年間の學資の都合を……そうしたら少しは妾の心も知れて不憫な者ぢやと思ふて呉れて末で目的を遂られた其時は下婢になりども使つて下さることもあるであらう……よしッ、成らぬとした所がアノ様な有爲の人と學資が無いとて生死半で捨て、僅くは國の爲に誠に歎かましいことである……妾は幸はひに一人の母はあれども姉と姉夫が引取つて親切に孝養して呉れる故二年や三年は妾が世話をしないでも差支ゑることは無からう……今只獨り斯して此家に居るのは自前でも真町の花月樓へ出る考へあれどもモウ斯なれば三年程身を賣るとしやう左すれば二百圓は大丈夫……二百圓あれば二三年の學資はドウか斯か支へらる、で在らう……若し足らぬとした所が少々は後から如何ともなる假令どうなるとも妾の力で一個の有爲

……イヤ學者を仕立るとすれば決して耻づるに及ばぬ……愈々身を賣るとして明日にも花月樓へ話して見やう……そうしてアノ人が金を學資に當て、下されば善いが……ナニ夫れには又思案もある……兎に角明日のアノ人を吉野屋へお願婆さんに送つて貰つて宿泊して置き二三日の間に極めてから……チャ何んだ爛燈が……眞暗に……モウ寐やうか……ア、どうも心か……どうも……チャモウ十二時が……丸龜町の吉野屋と言ふ最廣大なる旅宿の裏二階向ふの東山を一目に見晴し又金山の頂上に在る妙見宮をも眸中に入れ舊岡山城の高く雲上に突出たるを見るなど至極見晴し替り六疊の間に只獨り河村長之助が座を占め居るは彼の品吉が計らいにやあるならん其時河村は座を起つて二階の障子を開き西や東を眺め居りしが何か心に思ひ出すことのありてか又元の座に立歸りて太息をつきながら

河村「品吉さんが何の事やら譯も言はずに……行けば後から判ると無理に此の宿に人を随つて送つて呉れたが……薩張ドウモ譯が分らん……儘よどんなことか分るで在らう……恐る、に足らずだ……マが妙だわい

ト傭々思索巡らす折柄宿屋の下婢が二階に來り「へいお手紙を差出すを受取りながら何處からだらうと打視るに表には丸龜町吉野屋方にて河村長之助様態人に托すどあり裏には松本品吉よりと書付のるにぞ直ぐと封を押開きて讀む其文言に曰く

御煩讀も憚かりながら手書にて申し入れ候昨日は誠に失禮計り何卒御恕容被下度却説今日貴郎様を無理に該家へ御送り申上候事柄は何卒今二三日御滞留被下度然る上は屹度其原因相分り申すべく且又妾義は決して貴郎様に悪き振舞は致す間敷候も何卒々々御不審の段は二三日御忍びの程一入願上候倘は末筆ながら申上置候兼て該家に申付有之候得ば若し小使金御入用の時は御申付け御使用被下度委細は二三日の内相譲り申候早々頓首

フン文句と言ひ筆跡と言ひ中々普通の女子には……イヤ藝妓をなして居た者には似合ぬ何しろ二三日待てとあるから二三日待つては見るが……どうするものであらう金子でも貸て呉るのではあるまいか……アハ……金を貸す覺えも借る覺えもないに……

一向譯が……兎も角親切なる人には相違ない……金川に居る時顔は能く知つて居れども呼んだと言ふのは中學校卒業生が原芳樓で宴會を催した時に書生の宴會だから三弦何ぞは無用だとの説に賛成者多く只酌を取る爲めに品吉等數人の藝妓を呼んだことがあつた計り……ソレモ僕が獨りで呼んだのでない多人數の其内へ……他の藝妓などは一回や二回呼ばれた客に途中で會ふ所が知らぬ振りをして聲さへ掛けぬと言ふ輕薄に引換へて……昨日の様子と言ひ今日のこの手紙の内に金が入るなら該家に言付てあるから使用て呉れと書てあるなんぞい……ア、親切なる人だ我れ若志を得る日あらば昨日の所爲と今日この手紙にある親切なる文句には屹度酬ひてやる時があらう……兎に角二三日は待つて見るべしだ

ト河村は品吉が手紙の様子如何なることか分らざれども二三日経ば分るも必す待つて居よどの事なれば彼れが心に隨ひて二三日待つても我身の上に差支とてあらざれば覺悟定めて待ちけるに早其日は暮果て、明日も又明し暮しぬ借其次の日即ち三日目の朝八時頃に成りければ河村の例の如く朝飯を喫しやがて其座を立ちたる間もなく宿婢が急いで走來り唯

今此か手紙が郵便でと渡すを取つて打見やり

ナニこれは律留だナ……フムン……失張り品吉さんから……書留の郵書とは……

讀んだら譯がチ、さうだく……矢張岡山から岡山に居る人に郵便とは……殊に書

留とは……人に托せば善いに

ト獨言つ、急ぎ封を破り中なる手紙を出さんとするに其手紙の内に洋紙様の物の巻さわる

を見付け先づこれはなんであらうと引出し見てヤアコレハと計りに驚愕仰天……二百圓の

爲換手形が入つて居るが……コレを讀めば其因縁は……だが若し表の名宛が相違して

居らぬかと餘りの不審に又表書を讀めども我名宛に相違なければ下に落ちたる手紙を取り

上げ口の内に讀む文句は

手紙ノ文句 拜啓仕候先日來より妾の舉動定めて御不審の筈と奉推察候今日

は鐵面皮をも不顧妾が衷情を申述べ候間何卒御憐讀爲成下度候實は妾

の如き賤身身の程も知らず斯く申上候得ば嗚々御立腹と存候得其餘り

思ひに堪へ難く候儘乍耻申上候妾事は兼て貴郎の御氣質を敬慕仕り明

暮相焦れ居り候得共是迄の申上候期會逆無之憾に悲しき月日を相送候

折柄妾こと先月より只獨り當地へ参り候ひしが仕合となり不計も先日

中嶋の大金樓へ年賀旁々参り候歸り掛け貴郎に京橋にて御目又掛り無

理に御連申しての歸るさに承り候貴郎様の御成行御氣毒に堪へ難く

妾密かに考へ候に妾の貴郎の爲めに自から百年の命も惜まじと盟ひ居

り候事故今度の如き時こそ如何にしてか學資を御取替申さばやと千々

に心を碎き飲ひしも差當り宜き都合も出来候らはず獨り心で歎きをり

候次第にて尙ほ能々貴郎の御身上を御推察致し候に御氣質と云ひ御才

氣と云ひ御學文と云ひ何れも天晴にて居らせられ候ふも當時は文明日

新とやらにて中々小康に安らう時に無之學文の上にも學文を積み以て

家政と名譽を尊ぶ世の有様と申す事を兼々或る御方より聞き待べり居

り候得ば乍失禮貴郎様にも未だ之にて御修行を御廢止には相成ぬ事と

相心得候義に付いての這回妾は聊かなれども別紙爲替面の金額だけ貴

郎に進呈仕り候間何卒御懸念なく學資金の内へ御加へ被下度様願上候
 且畢りに臨んで血涙を流し一言御願ひ申上候妾は幼より一家の不幸に
 逢ひ止を得ざる事情より只今の如く賤業を營み居り候得共妾が日々神
 とし佛として祈るものは只其敬愛なる優適なる貴郎の一つの精神の外
 に無之妾の生れて十有九年初めて藝妓となりたるは十五の春にて以來
 四五年間のその際幾千人の顧客に接し候ひしかり知らざれど妾は藝を
 賣て糊する本色に背きて自から良心に耻たる所爲ありしことば無之然
 るに如何なる因縁にや初めて原芳樓の二階に於て貴郎に接するの榮を
 承け候ひしより妾が心は頻りに貴郎を敬慕して止み難く自から矯めて
 も矯め兼る溢る方なき情念をば少しの御憐憫爲し玉ひ候て御修行御出
 世の後は假令下婢と爲し下され候らふてなりとも御側待べるの榮を
 玉はらんとを呉々も相願ひ候右の事情實の妾拜趨の上にて御願ひ可申
 上等なれ共都合に依り故と書留にて勝手計り仕り候先の用事のみ早々

謹言

二仲妾は只今より大阪新町の吉川樓と申す家へ参ることに相談極まり
 候故到底三年間は御目に掛ることも相叶ひ不申候依て貴郎様に於ても
 御目的を達せらる迄の音信不通こそ願ひしく候

河村若旦那様

品吉

之れを讀んだる河村は呆然として暫しは只胸先の動悸高く其音自分の耳に聞ゆ血行の早
 く循環する計りなりしが素より河村とて有情の動物、靈妙なる人間、如何でか此品吉が盡
 す情の深くして密なるに感せざらんや左れば人心は維れ危く道心は維れ微にして若し柳下
 惠を學ばんには魯の書生ならでい協ふ可からず我を忘れてア、と計り一聲高く身を起し爲
 替を取つて押戴き手紙を仕舞て袂に納め一目會ふてこの禮言はんと表の方へ飛び出たり

第五回

日本第一の大都會なる東京の繁華の様は中々鈍筆にては評し盡す可くもわらず別けて淺
 草觀音は靈驗赫灼なりとて參詣の入山を爲す計り之れを目的に一儲けせんと最前より二王

門前の横手に客待せる二人の車夫互ひに懐中より煙草入を取り出し車の腰箱よりマッチを出して煙草を吸付けつ、一人の車夫が口を開きて

車夫「チイ熊や今日のアノ備前の畜生の車夫は出て来ない子エ

熊「オ、今日はマダ来ない様子ダガ……一体感心な者シヤアねへか……サア元ノ備前藩士で七百石も取つて居た人の悴たさうだが近頃何でも貧乏して親から學資を貰ふても出来なくなつたこのことで……ドウモ車夫とまで身を下しても矢ッ張勉強して居るの剛氣な人ヒヤアねへか……子エ八公世の中は様々ダヨ親から月々大した金を送つて貰つて何不自由なく下宿から通學して居る畜生もゐるし又アノ様に艱難辛苦を嘗て學文する畜生もゐるが却つてアノ人物が大した者に成るかも知れんヨ……

八「ソウダ違ひチエ彼様な人物が大したものに爲るに相違子エヨ……ソレニ第一驚くのは當地に段々國から出て来て上等の官員や紳商になつてゐる人があるから誰でも少々の學資の貸して呉るさうだがアノ人は國に居た傭人の貸資で一度勉強した所が僅かの間又其の貸資主が破産して遂に自分等も退校する様な始末になつたさうだソレカラ人

は當にならぬ獨立獨行して目的を達するのがよいとて岡山を飛んで當地へ来てからは國の人の所へは少しも立寄らず來た當分は何でも驛遞局の發着課とかへ雇はれて十二圓も月給を取つて居たさうだが何分身体を束縛ては自分が目的の法律學を勝手に修行するこゝとが出来ぬとて該局を辭しソレカラの商家の丁稚や會社の手代、鯛屋の出前持、宿屋の簿記生、牛肉屋の雇ひと段々身を變へ甘いも辛いも一通り喰つて見たさうだがドウモ主人持ちでは到底勉強が出来ぬとて一月程前から今の様に車夫と成つて朝から三時迄は神田の法學校へ通學して三時から車を引くと常々話して居るが何んと剛氣な畜生ヒヤアねへか……

熊「已らも其話しは聞いて居るがソレ又中々好男子ヒヤアねへか……色の淺黒い……少し苦味が走つゝ顔で目がキツト釣り上つて居て……アノ男が若し客を乗せて芳原へ往つたら大變ダア！
八「さうだアノ顔なら娼妓が死ぬヨ……兎角車夫には勿体ねへヤ、アハ……モウ何時だらう……ナニ三時過ダと……チイ熊や向ふを見子エ瞬をすれば影とは能言た

もんだ畜生の車夫が遺て来らア

ト兩人の車夫が評を爲し居るところへ向ふより廿才計りの新車夫が空車を輾々と曳ひて兩人の車夫の傍へ来り最と叮嚀に辭儀をなし往來の邪魔にならぬ所へ車を置き又車の腰箱の内より一卷の書物を取り出しそれを手に持ちながら兩人に向ひ

新車夫「何誰様も御精が……………今日ハ澤山御客がかりましたカナ……………」

熊「イヨお早ウ……………モウ學校を引てからですか……………イヤマダ今日は二拾錢計りの儲けで一向詰りヤせんのカ……………」

八「貴殿は日々學文を勉強爲なさるから夫だけでも善い加減勞れるのよ又これから引出すのハ大分骨ですチエ……………」

新車夫「ハイ中々辛苦ですけれども仕様がありません……………一日仕事を致しませんとモウ明日學校へ行けない始末ですから

ト話す折から仁王門の内より美麗なる衣服を着たる商人体の一人の男と最も艶姿なる二人の藝妓一人は恰かも雪を耐ぎし梅花の如く少し瘦方なれども背高くして腰細く若し溝客に

見せたらんにハ蕙妖蘭心と評すべく今一人ハ顔肥滿勝ちにて圓形なり頬は桃色を帯びたるが如く洋人の見て涎を流す品物なり諸如斯き尤物を携へつ、仁王門の外へ出でたるを早くも見て取る氣早き車夫先づ熊と八どが如龜々々と歩み寄りて腰を低くし手を揉みながら

熊「ヘイ旦那お安く……………ドウカお伴を……………願せせんか……………旦那……………旦那……………」

八「ナニお安く参ります……………ヘ旦那之職談ヲア五座いやせん柳橋迄ケンコで圓太郎馬車から尻が来やすアハ……………ドウカモウ二錢だけ……………ユウケイス三人様です

か……………チイ備前……………早く來なせい柳橋まで旦那があるから……………」

ト其際便所へ往て居りし新車夫を呼ぶ聲又一人の藝妓は備前と言ふに不圖意に止めつ、向ふより來る新車夫と顔見合せハツト計りに驚く有様左れども客と他の藝妓の手前もあれば故と何にも知らぬ振其儘車に打乗りて柳橋の或る茶屋へ車を横に着けしかバ客も藝妓も車より下りて車夫に賃錢を取らずれば車夫は皆一體を逃べつ、車を曳ひて立去らんとする時一人の藝者が振り返り車夫さん貴郎丈け一寸待つてと呼び止められ新車夫は極まり悪るげな顔つきにて其場に暫時扣へけり

此處の廻町區富士見町二丁目の中程なる富士見亭と言ふ料理屋の奥二階に男女二人の差向ひ二品三品の肴にて酒酌み交す様子をみるに女の藝妓らしく男は車夫体なり其時藝妓の呑み差たる杯を杯洗の水にて洗ひながら車夫に差し自から酌を爲して言へるを聞くに

藝妓「アノ一須野さん今日淺草でお目に懸つた時の眞實に驚愕り仕ましたヨ……マア緩くりと向や彼や貴郎のお身の上話をお聞かせなすつて……成ほどそれではお困却で嘸ぞ御艱難で……定めてお國元の御両親が御心配チ……ドウモ感心致しましたた夫れでの貴郎は三時迄は神田の法學校へ夫れから車を曳いて糊口と學資とお儲け爲さると……そんならモウ一年餘りになりますのですか……貴郎が岡山へお越しに成つた事の一寸聞きましたがお其後妾は此の地へ參りました也其跡の事は一向知りませぬがアノ河村さんヤ品吉さんは矢張無事で……チヤさうですか夫なら貴郎も御存知無いと夫れでは今貴郎の御住居は……チヤアノ麻布市兵衛町二丁目五番地太田仁兵衛方ですか……アノ須野さん誠に御迷惑でせうがドウカ妾のお願いを聞て下さいませんかト藝妓の言葉に車夫は懇懇に打黙頭さ一口呑みし杯を下に置きて

車夫「如何な事かは知らぬが僕の身に叶つた事なら聞させうから遠慮なく言つて下さい……イヤ身に叶ふことなら決して異議は言はないから……

藝妓「それで安心致しました夫ならドウか貴郎の妾と親密の情交を許して下さいませ……カア今妾が唐突に斯なことを申上げたら嘸ぞ御不審でもありませうが今此事を言ふのは偶然ではありません……妾が未だ金川に居りました時から妾は貴郎をば最敬すべき尊愛すべき情人なりと勝手に許して居りました……

車夫「其御親切は實に有難い譯ですけれども……ドウモ僕の如き貧書生イヤ車夫の身分特に當時學文を勵磨する折柄也……ドウカ其事ばかりは……小竜さん決して貴娘を厭ふのではない……僕も素より有情の人間だから……貴娘の如き窈窕たる顔姿と優美なる其情愛には僕と雖も如何でか心が動かざらん誠に嬉しい喜ばしい譯ですが……到底今の様なる僕の体裁では……ソレニ第一貴娘の商賣も關係する道理……僕も折角車夫とまで身を下し百難千苦を成して勉學の際なれば……今婦人なぞと彼是する時は成業の大障害物であるから……

「サア其御言葉は御最ですが妾の心情も少しは御推量下さい……………妾が貴郎に御交際を願ひますのは貴郎が御心配なさる様な事でのありません……………妾は貴郎が其心配なさる御勉強心を奪ひ千難萬苦を水泡に……………サア水の泡に成る様なことの致しませぬ……………妾は却つて貴郎が一時も早く一分時も速やかに其熱心なる目的を達せらるために及ばずながら一臂のお力ヲ……………妾の他人の様に卑猥なる肉交をば貴郎に望むものでは有りませぬ……………妾は賤業を營み朝には東客に侍して酔騒の間に笑ひを賣り夕には西郎に聘せられて亂舞の際に媚を呈す誠に果敢ない身であります……………妾の心は清潔に咲きたる泥中の蓮花に倣はん事を常々に望んで居ります……………妾は一生懸命貴郎の爲めに若し情交を許るされんには貞淑を守つて只藝を賣り心を賣らぬ者であります……………妾が一生の苦樂は貴郎がこれを許さるゝと許されざるに由て分る所であります……………妾は當時これを願ふ者でのありません當時から其約束を希望のであります……………妾は貴郎をして車夫に苦しましての置きませぬ……………妾は貴郎の其才器と其剛膽とを誠に敬慕して措くことが出来ませぬ……………妾が貴郎を焦るゝの貴郎の前途を占

みて……………言はは情慾でありますけれど……………妾はこの願ひが若し叶ひませぬ時は最早望む所は有りませぬ……………妾が藝を賣つて糊するは賤しい様で……………ソノ賤しい身を願みすこんな事を望みますのは實に鐵面皮な譯ですが……………妾は只情交を願ふもので強て肉交の願ひませぬ……………妾し貴郎の妻妾を願ふものでありませんが……………願はくば下婢にでも……………妾は聊か經濟の話しを聞いて居りますお陰で兼て貯金を致し居りましたのゑ知らず知らずモウ七拾二圓四拾八錢を江戸橋の驛遞局へ預けて有りませ……………妾の両親も無く兄弟もなく只伯母がある計りですが其伯母の一生樂に消光せる様に致して置いてありますからモウ勝手氣儘で……………妾には當時金は入りませぬから……………貴郎ドウカ其金を差當つての學資にしてモウ車夫をお止め下さい……………其間に妾が月々の資金は如何にか致して送りますから……………イエ何位貴郎が然仰しやつても決して斯して下さらぬ時は……………最前貴郎は何と被仰つた何んな事でも聞くから遠慮なく言へと被仰つたじやア在りませぬ乎……………遠慮なく言ひしてから厭だと言ても聞きませぬ……………ドウデモ願ひを叶へて……………言葉をお食みなさるは男子では有りませぬ……………

ト藝妓が熱情に車夫は暫く黙然として言葉なく只心の内にて思ふ様は

車夫ノ心想「我ハ如何なれば斯く助けに逢ひしことなる乎……この婦人が今まで我を思ひ居たるとの誠に意外なることである……中々親切なる婦人であるから之が言ふ通り車夫を止めて擧る彼れが望みに任せ學費を借るとしやう乎……今彼れは情交を望んで肉交を望まないと言つたが誰れがアソナことを教へたのであらう……彼れは肉交と情交の意を充分解して居てアソナ様に言つたであらう乎……情交計りで毫も肉交を望まぬ者は恐らくあるまい……イヤ在つた所で言ふ可くして行ふ可からずだ……今僕がその婦と情交を結んで親密な交際すれば自然と肉交の情慾が双方から起つて来るに相違ない……彼が情交を欲するは肉交を望むの下作へである……併し今彼が密なる事情を述べたるは皆潔白な精神の様に思はる、特に金を貸すから夫れで勉強してと言つて呉れる所を考へ見るに決して凡庸の婦人では無い……情交も肉交も俱に許すも決して耻しくない僕の爲に貞淑を守ると斷言したことをさへ在た……イヤ、我郷閭を辭せし

時の精神の假令如何なる助があるとも人に依て事を爲す様では業を遂ぐる事が出来ぬイナ出来るも我は盟つて之れを採らず獨立して業を遂げ世の怠惰生の眠りを攪破する心算で既に車夫に迄成つた位だから……今更他人の助を受け……別けて藝妓に金を借りて學文仕たなんぞ言はれては……實に車夫を成して學文したより未だ外分が悪い道理……我精神に耻づる所爲だから……ソレ計りでない世の多くの貧書生が自から成すことを思はず自から千苦萬難の内に學業をなす可き剛腸を養ふ氣を出さず却つて萬一の僥倖を待つて設り又人の助を望む様な僻が起る……今僕がこの婦人の助あるにも抱はらず斷然之れを辭して自から學業を成し遂げる時に於ては聊か儒生を奮起せしむるに足るべく第一我が本心に愉快である……然し折角彼れが敬慕して呉れるを無情にも之れを否むの……全体こんな事とは知らず如何な事でも聞くと言つたのの輕率であつた……エ、儘々情交だけの三年か四年先さで相互ひに結ぶと言つて置けば如何様に言つて居ても藝妓商賣だ其内には勝手な他の人を選ぶだらう……然なりく
ト意を決したる車夫は差俯きたる藝妓に向ひ

車夫「如何様僕が初めコンナ事とは夢にも知らず何でも聞くと言ッて置いて今更彼は言ッたら
 嘸貴娘も言葉を食べ男だ當にならぬ人物だと立腹するであらうがドウモこの事だけの
 …………… サア其譯と言ふのは外でもない兼て他人の補助にはならぬと言ふ事を親友舊故
 に盟つて居るのみか苟くも男子たる者が如何に苦楚を嘗むるども婦人に助けられて學文
 を遂たと言はれては……………イヤソノ英國なんぞの比例を取るとは出来ぬ英國や米國
 には今貴娘が言ふ如く草莽より起つた一書生が紳士等の令嬢に助けられて大いに社會に
 博名したと言ふことを能く小説に綴つてゐるが日本には未だ僕が聞かない所だ……………ヨシ
 そんなことが日本にゐるにもせよ僕は之れを欲せないから折角の御親切……………實に僕の如
 き懦夫謝材男をソノ程に思つて下さるゝ忘らるゝ譯ではないが……………三四年先なら決し
 て貴娘の今の言葉を辭へられない……………三四年忍んで待つて下さるなら素より貴娘を僕の無
 二の情交者として親密に交際することは盟つて背くまいけれども今から其事をと言はる
 りは甚だ困却であるからドウカ……………ソナラ金丈け使用て呉れど……………其事ハ決して僕
 が喜んで忘却せぬ所なれども今金を貸るのは即ち他人の世話助力に成るも同じ事だ

からそれで事を分て言ふのである決して悪からず思ふて下さい……………眞に貴娘が僕を
 慕ふて下さるなら今三四年を待つて下さい……………ナニ決して虚言は言はないが其時
 では貴娘は又他に親密にする人が出来るであらう……………
 車夫「可憐さうにそんな事ナ……………妾がソノ精神なら決して貴郎に向つて無理無体に御願
 ひ申す譯が有りませんじヤア御座いません乎……………妾ハ只今貴郎の三年か四年程待てど
 言のれたお言葉を固く守つて居ります其時こそは彼是とは……………
 車夫「其時は決して虚言は言はない必らず親密なる交際を相互に……………
 車夫「ドウカ左様して下さいナ……………コンナ嬉しいコンナ喜ばしいことは有りませんが
 只それまでの貴郎の御辛苦がドウモ妾は心痛で……………
 車夫「ナニ辛苦艱難は實地の學文だ是位ゝの事に屈する様ではあらぬ……………アノ今大臣だれ
 議官だのと言つて居る人の内にでも維新の際に色々と辛苦をして來た人が澤山ゝある
 維新の際と當時とは聊か譯ハ違つて居るが艱難辛楚を踏まぬ程不幸なることは無い艱難
 辛苦は他日愉快鼓樂を生むの父母であるとの西洋の學者の格言がある……………メカラ僕

み其通り今如何なる辛苦を爲すも他日百倍の快樂を求むる爲めと思へば少しも難義と
……ソレハ左様とモウ大層酔ひましたから僕は御免を……

藝妓ソナナラ假令此儘逢はぬとも三年の後は屹度願ひナ……

車夫其御入念には及びませぬ學文さへ成業た上は何時にても情交を互ひに結んで樂みま
せうが先づ夫れまでの貴娘も充分身を大切に勤めて下さい

藝妓貴郎も我慢を成さるぬ様に
ト互ひに意中を語りつ、末の盟を立てるうへ手を拍いて下婢を呼び其定は藝妓が濟し二階
を下りて表の方へ連立ち出て車夫が藝妓を乗せながら何地とも無く引き去りける

記者曰く抑もこの藝妓と車夫とは何者ぞ看客諸君は大御推察も之わらん藝妓は即ち
前回に於て河村長之助が爲めに眞情を盡し身を再び川竹の浮節に沈めたる藝妓品吉と共
に本編に顔出し爲したる小竜なる者にして而して小竜が當地に來りたる由來ハ今車夫と
物談したる内にある如く別段深き譯あるにわらず又車夫ハ即ち河村と俱に本編の大立者
須野憲一郎が成れの果なり而して何故車夫と迄零落せし乎と言ふの譯柄は本編の初め淺

草觀世音の仁王門前に於て車夫熊公八公が話の内に明かなるべく又此の構の始末は須野
が淺草より小竜を乗せて柳橋に來る所にて思ひ合さるべし

第六回

京都は地質高燥にして加之閑靜蕭々山水に富みたる土地とて諸國より遊學する書生日
に月に多く特に二三年前より京都法學校の設立ありたるより關西の該學に志ある書生ハ是
迄の如く東京に笈を負ふもの少なく其里の近きと土地の學文を爲すに適當なる所に依て皆
競つて此校に入り修行すること、はなりぬ夫れは備置さこ、に川原町通り出水町に一軒の
下宿屋あり餘り廣からず又狭からぬ一構へ下宿屋には適當の家屋なるべし表の四角なるガ
ラス燈には吉備屋と書付け此表二階に四五人の書生何れも法學生徒と見ゆ誰も彼も法學通
論の講述筆記を眺め居る様子にては未だ入校一年以内の資格ならん乎コハ記者が當推量な
れども又當らずとも遠からずと言んのみ今其内の一書生が一番に倦情を催せしか眺め居た
る筆記を仕舞て机の中央に置き四方を見回して聲高く
△書生「オ不請君今日は日曜だから是から散歩はドウダロー……」

○書生「宜カロー……折節は散歩しないと身体が積かないチー……」

×書生「それより先きに牛肉説はドウマ……ソノカラ圓山へ歩を廻らすは如何

□書生「然り〜時々牛肉を喰って身体を養はなければ實に衰弱極まるヨ……」

△書生「如何様其説は賛成マ……諸君異論の無からう……ナニ異論は無之候願首々々か

アハ……ソノツツヤア下婢に命じて買つて來さう……何位ので宜からうか……三百

目マ……トハ又餘りじやアチエか……善しく〜

ト△書生は獨り轉々周旋振り早々手をポン〜と拍てども中々下より返事を爲されぬ迷に

は大聲を上げながらチーお梅ドンーお梅ドンー……

下には此の家の下婢お梅とてその年頃は鬼も十八蛇も甘才と言ふ娘盛り顔の丸ボチヤ當世

向色の小白く唇の廻りの太肉とした所を睨んで書生輩も折節は袖襷を引く事もありとぞ开

ハ兎も角今お梅は下の方にて何の書生の衣類にや酷く綻びたる箇所を縫ひ居たる折から二

階より大聲にて呼しゆる縫掛けの衣類を傍に置き急ぎトン〜と二階に登り彼の書生の間

に到りて何の御用と尋ねれば△書生は苦い顔付して幾許かの金銭を渡しながら

△書生「お梅さんこれで極上等の肉を三百目とソノカラ上等酒イヤ櫻田ビールを一本買ッ

て來て下さい……至急迅速その大きな唇に帆を掛けて願ふヨアハ……」

梅「又△さんの御戲談計り唇に帆が掛られるなら掛けますから△さんの襟を貸して下

さいチホ……」

□書生「アハ……中々お梅ドン甘く槍込んだチー△君もソイツニハ降參マロー……」

ウ眞正に早く……大きな唇を振つて二階を下る所は實に奇觀々々

一同「アハ……アハ……」

×書生「時に諸君ヨ當家の主人は怪しむ可シマツ……如何となれば極々下等の飲食を

僕等に供用ふて三圓五拾錢も下宿料を取込むとは……」

□書生「蓋し其所業の惡むべしであるチー

○書生「抑も不都合千萬だが然し我國の法律に未だ不味物を食はして宿料を高く取る者

は刑法第何百何十條云々の明文が無さを以て無罪日放免すと僕が宣言してやるヨ

△書生「戲談の措いて今諸君等の説の如くドウモ當家は非常ニ不待遇を極めるが一同轉宿

仕て遣るべし………ナニ大聲でも善い亭主が聞けば成程そうかと以後は鄭重にする
かも知れない

ト何處も同じ書生の雑談下宿料が高いと不待遇だとかと頻りに評をして居る所へ下婢が
肉をば買ひ來り色々調理してやがて二階に運び來れば待構へたる書生輩速かに勇み進み
寄り肉を喰ひビールを飲み勝手氣儘の無禮講暫時の愉快を極めけるが全体△書生の多辨家
と見ぬ今ビールを一口飲み乾して杯を他の書生に差すや否例の薄さ唇を動かして起
つて演説流の口吻をして曰く

△書生「諸君最早三百目の牛肉一本の櫻田ビールも喫し盡し汲み了つて腹は満腹を告げ將
に散歩の念割々たり而して諸君と散歩の地は何れを探るを以て可なりとする乎御園内の
散歩の如何否御園内は道甚だ近くして而かも塵砂風に起つて目を眩する虞あり故に之
れに探るの不可なるべし然らば黒谷に探らん乎黒谷は廣觀なる寺院あり老樹其際に點
綴し鬱幽寥寂として晝と雖ども尙薄暮く四方に人填わつて靈魂恨みを鳴り骸骨顯れて躍
ると言ふの仰山に似たれども實に陰氣極まる所にして書生の散歩する所におらず然らば

京極に探らん乎京極は日本有名の觀遊場にして一度ひ足を運ばせば自れが開かんと欲
する所聞くを得ざるものなく自れが觀んと欲する所觀るを得ざる所をしが加之此の處
は美人の輻輳する所にして摩挲接肩誠に櫻花の園に笑ふが如く桃李の林に媚ひるに似た
り左れどもこの總ての觀は午後五時以後を以て最上となす故に今は不可なり然らば散歩
に適切な地はなき乎イナ在り圓山の地あるなり圓山は土地甚はた高かくして一瞬の下遊
遠として全市街を睨るべく空氣の新鮮にして身体に益する所あり或ひは五六十錢を一人
前に奢つて也阿彌の洋食を喫すべく或ひは十錢を一人前に投じて温泉に浴すべし否々洋
食也浴泉也我々寒貧書生に不似合なる所爲なるを以て預じめ今より各々二錢の焼芋と
一錢の煎豆を携へて往き肚餓れば焼芋を喰ひ氣欠伸なれば豆を噛み而して他人の前を通
過する時は一齊に氣張つて見玉へ焼芋と豆との功能は著しき者で忽ち鉄砲の如き屁を
發するを得べし屁鉄砲を以て人を撃ち臭死せしむるの刑法上の不倫罪中々以て愉快に
らすや

ト飽舌り立れば昔々大い笑ひながらヒヤ／＼賛成々々と動搖めさ立る其折柄□書生は塵

を吐かんとして二階の窓より顔を差出し瓦の上に唾を吐き、頭を左右に廻らして街道を眺むるゝ一人の美少年出水町を上生洲町の方へ急いで歩み行けるを早くも見付て口書を生は後に頭を振り直し

□書生「ナイ河村が今下を通るヨ………相變らず古洋服で………律書を大切さうに引ッ抱へながら………ナニ上生洲町の方へ………」

×書生「ム、一寸呼び玉へ………ナニ最う大分先きに往き過ぎたとフン、僕は一寸用がぶツたのに………諸君は未だ河村の履歴を知らないであらうが實に奇談があるヨ………」

△書生「成程アノ好男子の様子では奇談も澤山あるだらうが………兎に角驚くべき勉強家………其上特に温和な人物だから………」

○書生「ソウダ定めて懊惱して居る美人が………」

□書生「全体岡山人士に才子や好男子が澤山あるが河村の如き又一層ダ………それに第一感心なのは未だ入學以來二年餘りなのに學業の進歩は非常なもので教師校長も賞賜する所であるから後日望みある人物ダ………」

×書生「卒業後の裁判官になる考へであらうか代言人になる積りでであらう乎………」

○書生「ソレハ兼て裁判官になる積りだと話して居たら多分判事か検事になるだらう………然て中々の能辨家の上に今は割つて居るがキツトして八ノ字形に生へた口髭なんどは必詠らへの判事類だアハ、ハ、ハ、時に諸君その話しは中止としてこれから散歩に出掛べし」

ト書生の其儘話を廢め夫の圓山の方に途を探り散歩にこそへ赴ける

此處も同じ京都なる川原町通り東櫻町の荷積問屋の裏二階六疊の間を只獨り借切つて居る一書生今日の朝より三時間計り散歩なして歸り來り早々居間の文机に倚つて一巻の律書を開き心静かに黙讀なし居るものは之れ即ち河村長之助其人なり長之助の暫らく書を読み居たりしが何か思ひ出せし事のありけんア、と計りに巻を掩ひ頻り呻吟する心中を今記者が想像の筆を以て寫し出せば應に左の如くなるべし

ア、思ひ出せば二年前我れ故郷の地に於て意外にも藝妓品吉の助資を得たる時の其續し

さは物に譬ふ可くもあらざりし左りながら何分にも其金は品吉が有餘りて之を貸し呉れ

六十一

たるもので、無く身を苦海に沈めて貸し呉れたる譯も、一時は如何せん手と躊躇せしが、能々考へ見るに彼れが左程迄に思つて我々貸し呉れたる金では有り且つ我れは法學を以て世に立んとするの念慮頗りなる際なるに杉本氏一任以來は方向に迷ひ既に困難の場合で在つた故聊か大丈夫たる所爲には耻たれども天の與へる時なり之れを借りて勉強なし後日法律家に爲りさへすれば此厚誼に酬むることは最易きことなりと斷念なし一度會つて充分禮を述べ且我志をも告げんと思ひ吉野屋を立出て彼れが宅に走つて見たれば最早家には貸家札を張付わりて彼れは賣られた方へ往きし後にてありし故甚は遺憾には思ひしかど其儘其處を立去つて又一旦は宿に歸り夫れから段々思案せしに彼れは女にも似合ず業成る迄は互ひに音信不通に仕て呉れとの事をさへ手紙に書いて充分我が心を屬まし呉れたり我も又一念專意日夜勉強して一日も早く目的を達し第一父母に孝養を致し目つは彼れ品吉に酬ひんと幸ひ其頃京都の地に法學校の設立あつて未だ其日は淺しと雖も教師校則の完全なる東京の明治法學校にも劣らぬ良校なりとの評判ある里程も近く我々の如き脚氣質の在る身体に、東京へ旅を負んより京都の地こそ善けれと父母には品吉

が貸與爲し呉れし一件は故と告げず只京都へ遊學すると云ふ書面を宿より發し置きて出立なし其後この地に來りてより最早二年の日月を消費せしが幸ひに勉強の功を以て毎期の試験に落第せし事もなく此例を以てすれば今二期を修行せば卒業が出来る、然らざる上り判事登用試験に出で、及第なし裁判官と爲つて父母には孝仕し品吉には資助金を返却なせし上にて尙ほ禮思は彼れが望みに任すべきが彼れは全体我の如き倥傯の憐夫をば敬慕の餘り實に非常なる助けを我れに與へ呉れたり故に父母を除いて我思人となして酬むるもの、彼品吉の外はないから充分出来る丈けの禮をせんばならぬ畢竟我れが下宿に居り寒には温むるに足るの衣服を着け夏は涼を覺ゆるに足るべき衣服を着けて安々として漢學を爲すを得るも一重に彼れが賜物なり若しこの賜物無かりせば我が心志は如何に學文に焦燥するとも學資なければ止を得ず他人の食客と爲つて或ひは他人の奴隸と成つて僅かに之れを爲すを得ることあるとするも誠に優長千萬にて何年を期してが彼岸に達するを得るやらん前途甚はた漠として千里の沙漠を歩むに疲足を以てするに異ならず、夫を思ひ之れを考ふれば我れ程不幸の如くにして又我れ程僥倖を得たるものは無い

「ア、愈々勉強をなし愈々父母を養ひ愈々彼れ恩人に酬ひん………ナ、モウ十二時だ大層今日の時間が過ぎる様に思はる、………」
ト河村は只既往を思ひ將來を占ひて轉た沈呻たる折柄最早時分とて下婢が晝飯を報ずる聲と共に東山の午砲の響きドン——

第七回

嗚呼誰手言ふ花談らすと輕風の激する處艶々として花唇翻へり雨露の惱ます所妖妍恨を談るが如し嗟誰手言ふ水心無しと深淺自から色を成し緩急急洽恰かも心あるものに似たり非常の物尚ほ日然り況んや有情の人類よ於てをや左れハ誰手能くこの情緒の羈絆を逸して無情界に迸然たるを得る者あらん哉彼の有名なる「スペンサー」が哲政學緒論中にも人間の處世に於けるは尚ほ情海に船を浮びるが如し而して理風又帆を巻いて之れを航するを得べしと宜なる哉言や大凡生とし生ける人類の男にまれ女にまれ情慾に動き道理に靜かなるはこれ天賦と言ふべきのみ間談中止爰に日本第二の大都會入船千艘出船千艘の評り昔時の景況今は數百の漁船燈籠を吐いて相來し陸に汽車あり馬車ありて以て吾人交通の便を

計れば海陸の便昔日の比にわらず左れば市街の繁昌も月を追ふて盛に赴き他國人も年々に入込む者の大阪なる花の街の新聞に吉川樓といふ青樓あり主人は年頃四十二三歳の花の未だ散失せぬ最と愛嬌ある婦人にて今はお客の絶間なる乎平生に似合す寡然と人絶のせし表の間の長火鉢の傍に座つて鎮鑰製の火箸を持って中の灰を搔平らし居たりしが不圖心付きたる様子にて大きな聲を上げて小女郎を傍へ呼付けたり………
呼付けられたる小女郎はその名を小春と呼びてマダ十二三の離妓なるが兼て氣早の生質とて女主の呼ぶ聲を聞くより傍に走り來り何の御用と手をつけば女主の「お前一寸と言ひつ、此方向き」

女主人「アノ小春やお前モウ少し、てから品吉さんに一寸店まで來てお呉れど二階へ往て呼んで來てお呉れ

吉川樓の二階の寄付六疊の間に晝寐せる一人の藝妓勤めの勞れか前後も知らず華背國の遊女眞最中誰やらん品吉さんと我名を呼びて起す者あるにぞ忽ち夢破れて目を覺し

藝妓品吉「ナ、大層寐たこと………小春ヤン何う用があるノ………何たへ阿非さんが一寸店

まで来て呉れどお言ひだど……それでは小春ちゃん阿母に今往きますと言ふてお呉れ
……それから小春ちゃん下へ往たら手水を探つて置いてお呉れ好いかへ

ト言はれて小春の只唯々と答へ一階を下りて手水を探して居る所へ早くも品吉は二階から下
り来りて大きに憚りさんと言ひつゝ、上等の齒磨粉よて白き齒を一層白く磨き上げ先づ十四
五分間の手水に時間を費やし夫れより又十四五分は鏡臺の前にて費し総て三十分間計りも
費したる後漸やく女主人の傍に来て同じ様に火鉢の傍に倚り阿母はん憚りですが一ふく煙
草をと言ながら色の白い恰ど白魚の様な手を延じて煙管と古錦蘭にて作りたる煙草入とを
探りて一喫なし居る又女戸主の方にてはモット晝寐をお爲てからでも宜かつたのにも言ふ
も一寸の世辭振りなるべし其時品吉の自分が煙草を付けて「阿母はん」と女戸主に差出せば
大きにと受取りてスバ〜と吸ひ了り聽て其聲を叩き出すと共に「品吉さん」

女戸主「斯う言ふたら貴妓は又何ぞか思ふてお呉れるか知らんが妾等は決して悪う思ふて
言ふのではない……一体藝妓と言ふものは貴妓の様に堅意地では損な事が多い……又貴
妓の様に妾は藝妓やよつて藝は賣りますけれども外の事は知りませんと……」ト又客

が着いてもボン〜と列付ける氣儘な質では……モウ二年も立つ長い月日に只の一人の
お客も取らぬと言ふのは餘まり欲得を知らん話しや無いか……そりやモウ藝妓と言ふも
のは藝さへ賣れば善いとは言ふもの……欲と得との浮世に生れ況や廓勤めの浮氣稼業
を仕て居るからは……貴妓も此間新附座で有た栗原さんの色と金といふ演説をお客に連
て往て貰ふてお聞たであらうが「浮世は色と金とが何より第一……貴妓の歸つてから大
層感心してホンニそうじや浮世は兎角色と金ぢやと言ふて居てから……其色と金とが自
由になるのを故と心からこれを探らぬと言ふことが……由しや他に思ふ人があつた所で
それは後の樂みとしてこんな稼ぎをして居る内は懸る客は懸り次第取れる客なら取り次
第トツサリ金を貯蓄て可憐人と末長く消光して行くのが何より當世……今妾が見た所
では貴妓に限つて外に深い情夫の無いと言ふ事は二年以來の爲振から氣質で大抵分つて
居るが……これが良家の娘とか人の妻妾に成てゐる身なら貞女とか操節とか謹んだ上に
も謹んで他人に指をさ、れぬ様よせねば成らぬ筈なれど……藝妓娼妓と成り果て浮氣の
水に沈んでからは假令如何はと探たの……婦徳だのと言ふた所が他人は只稼業を見て難

が之れを知つて呉れて誰が之れを憂めることぞ善いも悪いも交込直段……若また吉川樓の品吉は藝妓こそすれ貞女ぢやと譽られた所がそれまでの事……世間に能く言ふ通り名を取るよりか得を取ればはホンマニ當世向きのよい格言……マアよう考へて見てど能何な貴顯の御方でも又紳商なんのと言ふ、御方でも皆な金の力が在るからのこと……金さへあれば今日の乞丐をして居ても明日は遽かに紳士株……妾も今の斯して眞面目で居ても元を糺せば信田の森其古穴の大狐イヤ狐や猫と言はれたる藝妓勤や娼妓を稼ぎ……根津や吉原品川の大きな舞臺も踏の上到底は情夫と一所に隨徳寺流れくつて此廓へ來たは來たれど一文無し……それから情夫と相談して妾は藝妓情夫は又或る俳優の番頭となり……互ひに末を樂みに一心不亂に稼ぐうち定め難きは人の身の上……力ども杖柱とも大事のく其情夫は僅か五日の病疾で……再び歸らぬ泉下の旅行……其時妾の心のうち餘りの事の悲さに泣て見ても叫んでも何の詮術わらばこそ……それから妾も斷念で情夫後先を思ひ廻はすに何ば馬鹿でも女でも金さへあれば他人を當にするにも及ばず又爲たいこと何でも出來ると……人の評さは何のその客を欺して金を取り……藝妓と言ふは

表向き五人十人の旦那を持つて一々鼻毛を算でから……少し計りは懐中も温つた後は唇喰御音……程能く藝妓を切上げて初めの小さな待合茶屋から段々仕出さ此の樓……青樓と言ふ様な青樓でいなければ消光に不自由は無い世態……貴妓も何時まで藝妓も出來まい譯も是から少しは氣を變て……金さへあれば如何な醜なお客でも……探て貰ふが貴妓の爲めなり卑樓の爲めこれが他の妓輩なら假令厭でも嫌いでも……買ふたら身体此方の物……無理でも客は探らすけれど……貴妓は氣こそ堅意地なれ賣出しの初めから評判さへも吉川樓……品吉くど相當に花も賣るし買入もあれば……厭な事なら成丈けは勤めぬ方が善からうと……思ふて遠慮のして見ても妾の家は兎も角も貴妓の先が案じられ……何處の青樓でも同じこと賣れぬ妓よりも賣れる妓が可憐のは自然の道理……矢張り妾も他の妓より貴妓が可憐い心から先きを思ふてこの意見必らず悪くは探らぬ様トツクリ思案をするがよい又合點が往たら何時でも……爲になるお客をば着けて進げるは妾の魂丹……

ト慾を交せたる親切振で意見をする、品吉は愁いとも悲しうとも思ひは胸に溢れ來て何と

答へん言葉さへ泣かぬ計りの顔姿暫時は頸を垂たざり心の内にて思ふ様

品吉ノ志想「餘りと言へば壓制極まる今の意見この身は藝妓に賣つた身ゆる客を大事又藝を賣るが真正の商賣……娼妓に等しい業をせよとは……親切どころか之れより酷い不親切な事はこの身に取ては無いものナ……マカ他の藝妓を見るに三人四人の客を取つて居ない妓はない様子……妾が心の底を知らねば矢張り客を勤めるのも無理はないが……神に祈り佛に誓ひ若し妻妾になれぬ時は下婢になりてもアノ人のお側に居たい計かりに身を賣つてまで眞實を尽した今のこの身の上……他の妓達は金や男に目を掛けて色と慾との二道……妾は氣質と名譽とを……両方らも慾情には相違ないが……女は婦徳が第一の資本……婦徳を破つて得た榮華が……何の樂しからうぞ嬉しからう……妾のこの身はモウ既に誓ふた人が……イヤまだ双方から打明て誓ふたといふ譯でないが……身の代金を學資に當て下さりしお心は少しは妾の氣の内をバ……モウ二年も音信不通で消光て居れば充分様子は分らねど……京都とやらで法律を御勉強との風の便り……御卒業の上頭を見るまでの……假令如何な事が在つても決して他に肌を汚してゐるものぞ……左は左り

ながら差當り何と返事を爲て宜からうやら……筆を妾の斯々と打明して言つて仕舞う手

……イヤくそれも善くない……ア、困つたのメ
ト品吉の思案の臍の定まり兼ね最と苦しさ其折柄同じ邸の海外樓から品吉さんにと聘が掛りたれば之れ幸ひと一寸逃れ直に其場を程能く胡魔化し衣裝を着交て海外樓へと急ぎてこそは赴きける

海外樓の二階には年頃四十余り何う見ても奏任以上の官員か左なくば大した紳商なるか然し紳商にしての餘り嚴格に過る風あり殊に八字髭をさへ蓄へたるは先づ官員さんの方が當るだらうと思はれたり「名指を爲したる藝妓の來る迄仲居の附にて一杯を傾けながら居る客人の是れ京都の或る貴顯然も奏任官の上等顔山部義昌君と言つて藉は岡山縣士族官は裁判所長の大任を帯びて御座る御方なれば仲居も中々左る者としてお聲の塵を掃ひながら

仲居「アノ旦那様當地へは昨日御着でござりましたか……誠に毎度御引立下されまして……どうも妾の酌では初まりませんがアノ品吉さんは何せ遅のでござりませう……山部「ナニモウ來るで在らうが……アノ品吉に己れは未だ一度も會た事は無いが一体ドン

ナ氣質の藝妓だらうか……貴様達の様に仲居勤めを仕て居れば藝妓の氣質を能く知つて居るだらう……何でも人の評判では大層美人だと言ふ事だから幸ひ今日は名指をして呼んで見たがホントニ左様かな……

仲居「左様です此廊に澤山藝妓もございりますが……容貌と云ひ藝と云ひアノ妓に及ぶものは在りませぬとの大評判です……その上誠に心切な妓ですから此處にも彼處にも最負が有りまして中々走りツ子でございます……それからア藝妓には似合ぬ堅い妓でモウ猥味が無い淡泊した妓でございます……ドウカ貴官様もこれから少と御最負に成さつて……ナ、品吉さんの足音が……」

ト言ふ折柄藝妓の品吉「トン／＼と二階に登り毎度難有うとはお定まりの愛嬌文句何な客かと思渡せば未だ初會の客人にて立派な官員体なれば最と懇懇なる初會の口誼を終るが否や三味取出し調子合せて弾んとするを客は暫時と押し止む仲居はそれと氣を利かして銚子の交りを口實に下の方へと座を外せば跡には妓と客の差向ひ

山部「イヤ品吉とやら僕は三味線は好きな故只酒の相手だけに成つて呉れ、は充分だ……」

品吉「それでは餘り座が白けまして……真正に興が有りませぬ

ト言ふ顔情々眺めつ、山部「義昌は心の内でコンナ美人を造り出すは造物主も定めて骨が折れたであらう聞しに優つた佳人だと恍惚として手又持たる杯を將さに膝に覆へさんとして初めて氣が付さぐつと一口に呑み乾したる猪口を品吉に差し

山部「チイ品吉さん三味は弾なくつても善いから充分己れに酌をして呉る、が善い……それから僕は貴様にサト頼み度い事が在るから聞いて貰はなければならぬがドウだらう聞て貰へるだらうか……」

品吉「ソリヤ如何な御用か存じませぬけれど……御用の趣きを聞きました上でなければ今から何とも御返事は……」

山部「フムン出来ぬと申すか……善し／＼夫れで僕が言つて見やう……外でもないがソリヤ品吉僕の妾に成つて呉れぬか……」

品吉「ハット驚いてソリヤ貴官妾の様な勝しい勤めの藝妓風情を……」
山部「素より承知の上で身受を爲し連れて歸つて宿の妾に……」

品吉「マダ初會の貴官様が心も知れの妾とば身受なさる、御心が……」

山部「ナニ僕の心が分らぬと……會ふの之れが初めてなれど貴様の評は遠から聞いて密かに胸を焦して居たるが今日の思ひに堪かねて貴様を呼び寄せ其上で直接に身受の談判を爲し妾に仕やうと楽しんで態々参つたこの山部……ドウカ色善い返事を頼む……貴様さへ承知なら青樓の主人に又僕の方から談判する……」

ト酒の上かは知らねども初めの嚴格又引かへて座さへ崩せし意外の談判左なきだに今日の女戸主に意見をされ困つて居るその折柄幸ひ口が掛つたもろヤン嬉しやと何時よりは足も進みて来て見れば聞くさへ厭な身受の相談前門虎の口を免れて更に後門狼の愛に會ひ忽ち面は青くなり又赤くなり品吉は震ひ聲を上げ泣かぬ計りの首付にて

品吉「且那樣妾の様な賤い女を……左程迄に被仰つて下さりますは……誠に御勿体ない次第でござりますすが……少し妾は譯在つて……二三年の間は決して男に肌身を觸ぬと天に在ます神様に堅く誓ひを掛て居ります故……ドウカお慈悲ですから其事又は……御免なまつて下さりませ……其外の事なれば……」

山部「イヤ其他には望みはない……男に肌身を觸れないのイヤ神佛に誓願のど今の藝妓には似合はない……餘程貴様は時代後れ……其時代後れの詞臺を聞いて貴様に見する物があつて……之れを見たら又も憂詞が在るだらうが……」

ト革囊の内より探り出す一枚の寫眞ソレと言ひつ、品吉の手に渡せば品吉それを見る迄は胸の疑ひ心の不審情々眺めてオヤと計り呆れて物を言はざれば左こそあらめと客人は莞爾と笑つて言へる様

山部「ドウダ品吉貴様その寫眞の人物をば知つて居るか又見たことのない人か……何の事だ寫眞計り見詰て涙を溢すとは……未だ品吉貴様一品見せる物がある

ト又も取出すは吉川樓へ差入れたる三年間の身賣の證文なりければ益々驚き愈々不審と品吉は如何なればアノ人の寫眞やら今又妾の證文迄ト合点行かねば急込つ、

品吉「ア、モウシ且那樣これは一体どうした譯で……妾は薩張り……」

山部「その不審は道理……随分長い譯だが緩々話して聞せるから一寸これへ一杯盛で呉れ

……

其時客人の杯を上げて酒を受けながら形を改めて話を聞くに……

山部一全体この話をすれば段々長いから委細の事は後よりとして差詰貴様の疑ひを晴すに足るだけ話そうが元僕は岡山縣の十族にて當時京都府の或る裁判所に出仕なす山部義昌と言ふものなるが其寫眞の河村長之助とは同藩士にて彼れが親父とは誠に勿頸の交誼を結び居りしが僕は二十四五の頃東京に到り或る省に勤任せし其後久しく年月を経て去年漸やく京都の裁判所長を命せられて任地に赴きし時に僕は裁判所長の故を以て該地法律學校内より發する法學雜誌會社の名譽會員と成りたり然るに該法律學校に岡山縣人にて評判なる才子あることを聞きし故能々其才子を探尋みるに計らざりき我と交誼を厚く結び居たる河村春高の粹長之助とは、夫れら僕の宅に日々暇さへあれば出入を爲す様になり遂には下宿を辭して僕の宅から通學する様な次第に成つたが一日長之助が留守の間に汚れたる衣類を洗濯して遣んど洗濯婆々に命じたることありしに洗濯婆々は應て僕の前にびた濕の一本の手紙を持ち來り只今河村様のお着物を洗濯致し居りましたらオッピ襟の間が綻びてる様に思ひますから見ましたら二三寸綻びて居りましたして其中にこの手紙

が這入て居りました故定めて大切なる手紙で在らう濡れましたのは甚だ困つたものですと言つて僕に渡すから成程大切なる手紙であらうが開封はしてあるし僕が見るのは何も別條はなからうと開いて讀み初めて知つた貴様の親切誠に心で驚いたが之れは誰にも秘密になし居り夫から長之助が歸つた時二階に呼んで手紙の始末を聞いた所が全く以てそれに相違はない今まで隠して居りましたは若もこの事を話したら卑屈な奴と御笑ひ在らうと故と隠して居りましたと夫れから一々其當時の有業有枝を談つて聞かす其都度に愈々感ずる貴様の精神此く計りの婦人なら假令賤しい稼を爲しても清く咲いたる蓮の花妻に直すも耻かしからずと此ことを長之助に話して見れば別に異條は無けれども未だ勉強の途中であるし父母の思ひくも在ります故と言ふのも決して無理ならぬと尙能く考へて見るに僕がこれを知らぬ内は兎も角知た上は一日も貴様を苦海に沈めて置てはドウモ心に濟されば早々身受をして置て河村が卒業の期までは少々月日もある故にそれまで貴様に普通婦人の道を勉強せしめんと思ひ付けて居る折柄幸ひ當地に用事もあり來た便に人を以て夫とはなく身受の事を吉川樓の主人に話せば主人は早々承知をしたれど此方から品

吉に話す迄はドウカ内密に仕て呉れと頼んで置き又常棣から名指で呼んで心にも無いことを言つたも畢竟貴様の心をば引いて見たる僕が計畧貴様の方にも異論はあるまい
ト始終の話に品吉の心の内の喜びは何に譬へん様もなく嬉し涙に稍暫し襟袵の袖を濕はし
ながら

品吉 左様な事とは露知りませず最前よりの失禮の段……ドウツ御免成されて下さりませ
妾は只今の御話を聞きまして餘り嬉いので……恰も夢の様で御座います……誠に厚
いお情で……河村さんのお側に……

山部 勿論々々そう致して貴様が心情的の深くして愛すべきに酬ゆる考へなれば……貴様も
その心算にて河村が目出度卒業する間は假令聊かの月日でも普通の教育を受けねばなら
ぬ……チ、モウ話しも酒も止めにして貴様は一旦吉川樓に歸り用意を爲して中の嶋の自
由亭へ出掛て呉れい……ソレカラ一所に歸京を致さう……

品吉 何から何まで其様に……御勿体ないやら難有いやら……そんなら一先妾は吉川樓
へ歸つた上で萬事の用意を濟せてから……

山部 早々宿に出掛て来る様に……

ト話し居る内既に車を命じ置きけん下より樓婢が旦那様お迎ひ——

第八回

戎翰他氏の言葉に爲し難さの事に遇て志氣を沮喪する人は大業を成す能はず爲し難さの事
に克戦せんと欲する志氣ある人は決して功績を失ふことなし」と宜なる哉柳橋の藝者小竜
は近頃如何なる故か氣分悪く恰も神経病の様な容体なれば随分自分も心配なし或る名醫に
掛つて居れど何分清々と氣も晴れず、ト言つて寐床に着くほどの事も無く甚だ難儀を爲し
けるが今日も朝から精神鬱々として只獨り種々の事を考へ出では自然と悲しくなりしにや
縮緬の襟袵の袖にて屢々涙を拭ひつゝ、心に畫かく唇氣樓を直寫せば

小竜 ア、儘ならぬが浮世とは實に能く言つたものだ……思ふ男には思はれず思はぬ人に
思はれたり何かして……ア、戀しい……ア、彼人の寫眞なりとあれば少しは樂みになる
ものチ……それは善いがアノ人は何故妾を欺したのであらう……麻布市兵衛町に居ると
言つて……其後尋ねて往て見ればソノ御方は知らないとの返事に誠に落膽したが……

居る所をさへ欺す氣なら大方皆な虚言であらうか……若し虚言であつたらどうしやう
 ……モウアノ時から二年餘り……矢張り當地に居らる、のは居らる、であらうか……ア
 ノ時神田の法學校へ通校すると言はれたから該校へ往て尋ねたら分るであらうか……イ
 ヤノ居處をさへ虚言を言れる位だから之れも矢張虚言であらう……法律を勉強して
 居ると言はれたのも虚言であらうか……マガアノ人は中々そんな人では無い日外濠草で
 會た時も書籍を持って居る位だから……勉強して居るのに相違ない……そうすると若
 し妾でも尋ねて往かど心配して住所を欺したのかも知れぬ……ア、モウ苦勞でならな
 い……チャモウ十時にも成るれにんで新聞屋は配達を仕ないのであらう……チャリ
 ノ……チャモウ十時にも成るれにんで新聞屋は配達を仕ないのであらう……何時でも此様などか
 ら投込ひから困るねへ外に新聞受が備へてあるのに
 ト小言を言ひながら今投込みたる讀賣新聞を手探りて先づ小説を讀み夫れから裏表を讀
 ひうち今度は秋季代官人試験及第者と見出しの分に注目する其全文に

●秋季代官人試験及第者 昨日豫期の如く秋季代官人試験を遂られしに志願者五十六

人の内漸く及第者は十二人にして其姓名は左の如し

- 岡山縣士族須野憲一郎 東京府士族平山義之 福岡縣士族森健太郎 熊本縣士族上野惟
- 義 廣島縣平民服部左太郎 山口縣平民原田勇之助 鹿兒島縣士族赤塚盛尙 岡山縣平
- 民野々村三郎 東京府平民國重六郎 嶋根縣平民平野三五郎 大阪府平民中島次郎 三
- 重縣士族重司伊勢男 以上十二氏なり

ト讀み終りたる小竜の善び……

小竜「チャマア須野さんが……フム……それでは……ア、感心な人だね……妾が見
 込だのも……ア……何處に住居をして……どうでも斯う成た上からは厭でも應でも
 ……ア、宿が知れぬ困つたね」

ト小竜が頻りに焦燥て居る折表から男衆が大急ぎで這て來て

男衆「直ぐと中村屋行きですから御調度チ……」

商賈ならば仕方ないが小竜の心は中々モウこの新聞を見てからは花に往く氣にもならざ
 れどさう我儘に往かぬが勤めの身の上心に染ぬ身支度を倉卒にして男衆に送られ中村屋差

して到り見ればサアお客が最前からお待兼ですヨと仲居が言葉に小竜はドンナ御方ですと尋ねて見れば二十二三の好男子で粹な所無けれども厭味なしのお方だヨと、ポント一ツ脊中を拍たれてチャマアそうと言ひながら奥の間へ通つて見れば如何に須野憲一郎にありければ餘りのことの嬉しさに物を言ふ間もあらばこそ其儘傍に走りより須野さんマア貴郎は……マア貴郎はよく来て……曾たかつた……

須野「小竜さんお前も無事で……久振りのこの面會……僕も大變會たかつたヨ

小竜「サア妾の無事ではありません……貴郎はマア能う虚言計り……市兵衛町又居ると言ッて……其後往て見れば虚言の皮……ダガマアよ呼んで下さいました……最う一年も貴郎に會はなけれど妾の焦れて死ぬ所でしたに……今日新聞を讀で貴郎のことを知て初めて……サツ御辛勞でしたらうねへ……何しろこんな嬉しい事が……

須野「辛勞は初めから覺悟だから夫れほどにも無かつたが……僕が一番苦しく思つたのは……貴妓と約束した交際の一件だよ……

小竜「アンナ者と交際を約束してから困つたこと、思ひなすつたツ……

須野「ナニ左様じやアねへヨ……何分一生懸命に勉強はした物の……貴妓に言ッて居た時までに目的が立てば好いと思つてのことダ……然し僥倖にして約束とは早く交際を結べる様に成つたは僕は甚だ嬉しい譯だが……若し貴妓は迷惑じやアないか……

小竜「チャ憎らしい事計り……何處の茶屋でなと聞いて下さいナ妾の品行ナ……貴郎が何位御迷惑でもお厭でも斯う成つたらモウ疫病神が取付いたと思つて居て下さいよナ……須野「ソノナラ僕も安心だが……アノ貴妓の僕と將來同穴の契りを結ぶ者へはないのだ

子エ……

品吉「アアマ何で左様なことを……貴郎が心に引か較べて……

須野「それでもアノ時情交計りで善は肉交は厭だ決して欲せないと云つたのを忘れて居る

ノ……

品吉「ソリヤ貴郎が妾の様な者に到底肉交迄の許して下さらぬと遠慮したからですヨ……

須野「僕さへ承知すれば貴妓には異存ないか……あるなら今の内わると言ッて呉れぬと後で困る……

品吉「何の在りますもので……妾の方から飽までも願ひ申す心ですものチ……」
 須野「善々貴妓の心が變つてさへ居らねば……」
 一應兩親の許しを受け其上のことにせんが……
 今では貴妓は如何な成行きになつて居るかソレヲ聞くのが第一必要だ……
 小竜「妾の身は何時でも儘に成れるのですし借金の様な物は一錢もありませんから今と言つて今にでも……」

須野「ソレヲ話しの調ふたが僕が不日歸省する時一所に一日歸るとしよう久し振りに兩親に見ゆ又河村長之助氏等にも會ふのを樂んで居るが同氏は郷里に居るだらう乎最早三四年も音信不通……」
 定めて僕の不信を怒つて居るだらうが……
 手紙を出すにも少しく耻る所があつて……歸省の後に萬事を談つて詫言せん……
 小竜「妾も又姉妹の様にして居た品吉さんに来てから一度も手紙も出さず……岡山へ出て居るとの事を風の便りに聞いたさき……妾も歸つた其上で積る談しを……」
 須野「小竜の兩人が頻りに談しの眞最中間の襖を廻り開きて圓ら此座へ入來りし河村」

品吉、兩人の顔を眺めて須野と小竜夢か現か幻か合點行かねば物をも言はず穴の明く程兩人の顔を眺めて呆然たり

河村「須野君實に久々よ……小竜さんも大層久しいチエ……」

須野「如何にも僕はこの遇然に驚い……それに品吉さんも……君は一体あれから當地に來て居たのか……」

河村「ナニさうではないト是より品吉の爲めに助けられたること及び山部が討らひの一件また京都の法學校も首尾よく級第なしたる而已か僥倖にも成績の優等なりしを以て得業士の榮をさへ蒙り遂には校長よりの上申により判事登用試験に出しに試験も可なりの出來とて先月二十五日東京府麹町區治安裁判所判事補を命ぜられ赴任せしが君の事は日々に案じ東京と聞いて居るから何時か逢ふ時があるに相違ないと所々尋ねて見れども一向逢はず今日不計も朝野新聞を開せしに君の事實が掲げある故大いに喜び早々手を尽して居所を探して見たるに神田雉子町の拾六番地と言ふ事が判然したから退出後其處へ參つて見れば只今他出されたる趣きを聞き残念ながら又他日にせんと立出て夫れから何處

を見當と言ふこともなく彼處此處と漫歩して最前此所へ來懸りしが不圖品吉が言ふに
今向ふの茶屋へ小竜さんに相違ない人が這入たと言ふらうソレハ不審否珍しい事である
幸ひ此方も一杯イヤ僕は禁酒黨だから何ぞ他の物にても喰べるとして第一小竜さんに逢
ふと品吉も頻りに言ふからそんならさうと這入て密かに仲居に尋ねて見ればアレハ小
竜と言ふ藝妓に相違ないとの事なればソナラ何卒その隣の間致して呉れと隣座に居
つて最前より様子を聞けば客と言ふのは君にして小竜さんにさへ相違なければ斯くは不
意を襲ひたるなり

トの長物語りに須野も車夫迄又身と落し法學を勉強せし艱難話し小竜が途中の親切から遂
に交際を親密に結び斯くの場合に及びたること其他種々なる物語に時間を消費し、が河村
は言葉を改めて言ひ出る様

河村「今聞くに君も不日歸郷するとのことであるが僕も不日其筋の許可を得て一寸郷里
に立越す心算なれば一所に歸省なし及ばせながら君と小竜さんの媒介の僕が責任……
品吉「妾は其時待女郎役を……」

須野「何卒萬事宜敷く頼みますが……君の都合でも何時で雉子町の下宿まで報知をして
下さ……」

河村「然らば本月廿四日……コウトイヤ廿四日までには運びますから君其心算で居て
下さ……」

ト之にて目出度く話も済み夫より暫時は愉快を極め後日を期して各宿に立別れたり
記者曰く今回に於て須野が河村に話せし内に洩れたるものを此に一言せんに須野憲一
郎は車夫となりて強學を爲すうち實に困難なる事情に逢遇せしことありたり开は返寒
凍々たる日に於て臂切れ法被一枚に身を纏ひたる時乎、炎天鏢金の日を犯して乗客を
催せし時乎、否決して憲一郎にして是等の艱難を辭し辛苦を厭はん哉憲一郎が精神は
常に艱難と戦ひ辛苦と争ふの勇氣あるなり去れば人に語て曰く「我平生之れを聞く人
を成就するものは安逸にあらずして勉強に在り容易にあらずして艱難に在り故に人
生何れの地位を論せず艱難の事と戦ひ勇力を奮ひ勉めて之れに勝つに非ざれば決して
一業一事を成就すること能はず蓋し艱難の事は人の爲には無上の良教師となること

恰かも失誤の事は却つて最善の試験となるが如し故に余輩は假令如何なる艱難をも辭せざるなり」と以て憲一郎が志操の剛毅なることを知るに足るべし然れど如何に剛膽と雖も如何に英傑と雖も之に一步を譲る者あり何ぞや病魔將軍即ち是なり夫れ人として病魔將軍に來襲せらるゝ時は誰か困難を感せざらんや憲一郎は不幸にして一度脚氣症に罹りたる時ありたり然れども身は車夫を營めば良醫に診斷を乞ふ能はず充分の養生を爲す能はず言ふに忍びず見るに堪へざる慘狀を極めたるは鈍筆にて中々に尽すべくもあらざりし只此憲一郎にして此病氣を罹り千里の異郷に呻吟たらしむるは天道果して是なる乎、非なる乎、轉た憤歎に堪へざりしも天の意何ぞ此の有爲の少年をして長く病幕に在らしめんや日を重ねずして全癒に赴きたり嗚呼憲一郎にして若し普通の少年ならんには能く之れを凌ぐを得べからざりしなるべし世間懦夫は多し憲一郎の如きは實に曉天の星なるのみ

第九回

山歌「秋が來たかエーな、アノ山奥でユ、ヤシクナ、葉赤れたす癖は鳴くヨ」

權兵衛「何んど六兵衛どんヤ、モウ秋も最中に成て來ましたか正直に鹿めが鳴きますノー
大兵衛「左様じやアノ様に鳴くのも矢張社を魚れてだと言ふが禽獸でも夫婦の情愛は同じことで在りますノー……」

權「それはモウ虫界に至る迄も同じことでありませうワイ……時に其話して思ひ出しましたが須野の若ヤ河村の若は昨日久し振で歸らしやツたさうだが……モウ貴殿はお祝ひに往らふさつたかノ……」

大「イヤ未でありますが何れ今日明日に一週往かねば成らぬと思つて居りますが……何と兒童の時から他の子とは違つて居りなかつたが矢張り學者様も成られたノー
權「それから近い内に結婚があるとの評判でありますが……アノ河村の若はモウ奥様が東京とか西京とかで出來たさうだ……」

大「その奥様と言ふのは品吉さんだと言ふて居るぞ……ナンソレ藝妓に出て居た横町の今田屋の娘ヨ……それから今度近の内に須野の若の奥には東京へ往て藝妓をして居た裏町の菓子屋の娘の小童と云ふ子ださうな……」

「品吉さんも小竜さんも中々器量者で須野の若や河村の若が他の人よりも才發者で昇雲する御方だと言ふ事を遠から見抜て段々苦勞をしてから到底思ひを叶へた次第だと言ふが何しろ藝妓には似合ぬ人達でありますノ……」

六 「何れ須野の若が、盃の時の賑ふことでありますだらうが……今夕の懇親會も盛んでありませうア……貴殿の方の息子も拙者の方の悴も此度の懇親會は平生どの違ふて東京から久振りに歸つた人の爲に特に開くのだから參會せずばならぬと十町余りもある金川へ日に五六遍も通つて周旋して居るが……定めて大混雜の事でありませうツイ……從「斯う人に敬まはるゝに引替てアノ西の息子ドンや江馬の息子ドンハ一向愚鈍人達でハわりませんか……岡山へ勉強に往つて居てから學文をせず青樓遊び計りして……」

六 「到底後又は不良ぬ心を起し……他人の書籍を不斷して賣つたもので……從「平生惡まれて居る故に……少しの事でも人が承知して呉れず警察署へ告訴した故今では二日市の監獄へ這入て居らるゝさうだ矢張り金持の息子ドンは平生綺羅錦繡を着たり美味膏粱を喰つたり金はある苦勞はないと言ふ盛梅だから誠に始終は儒夫に成つて仕舞ますノウ……」

六 「左様……時にモウ樵所へ來ましたから一吹して仕事を初めませうか……」
從 「善しからう……話に實が入つて今日は大層遅くなりましたから日暮で無いと荷が出來ますまいから拙者は輕荷に致します……」

ト二人の樵夫は話しながら徐々仕事を始めかけたり
原芳樓の門口に數百の球燈を連ね表に津高郡懇親會と太く書したる紙流を翻がへし最盛なる景況を表したり

今日の會主は南田忠綱と言ふ人にて會員總て八拾四名其他は皆附取周旋方の面々にて其盛なること僻陬には未だ見ざる所にして午後六時より開會なし暫時は獻酬杯廻に違なかりしが漸々時を経て宴將に酬なる時會主南田忠綱氏は奮然起て席上演説を爲して曰く

南田忠綱 「諸君私は御存知の南田忠綱で在ります忠綱は本日懇親會に於て不肖ながら會主たるの故を以て敢て咄々の辨を願ひ一言私の欲する所を述べまするが全体本會の義は須野君河村君の爲に開きたるものにて懇親會と言ふも差支は有ませんが其實は我々有

志者がこの両君の風采を稱慕して招待せし會でありますッハ兎に角諸君私又一言の自由と静聴を能へられよ

嗚呼滿場の諸君ヨ、諸君は朝起きられし時又必らず一度はアノ嶽然たる臥竜山を仰がる、で在りませう諸君ヨ、アノ臥竜山は何が故に高く雲際に聳ゆるで在りませう諸君ヨ、諸君はアノ加茂川の水を常に眺めらる、で在りませう諸君彼の加茂川の水は何故アノ様に清くして深いので在りませうか蓋し臥竜山には動かすと言ふ山心が有り加茂川には濁らせずと言ふ水心があるからでせう夫れ臥竜山の高く雲の上に出で、居るを見ますれば離乎アノ山の如く自分の名譽の高からんことを思はぬ人がありませう又加茂川の水を眺め見ますれば離乎自分の心がアノ水の如く清らかならんことを思はぬ人がありませう、ど山の如く名を揚げ水の如く清からんとするは誰れも欲する所で即ち人情の免れぬ所で在りませう然しながら山の如く動かす水の如く濁らぬと言ふ心を抱いて居る人は世間幾人か有ます恰かも雨夜の星と言も當らぬ言葉では在りません誠に正當の評語で有ます今情々考へて見まするに本會の賓主たる須野河村の両氏の如きは臥竜山の如く名は高く

揚り加茂川の如く心が清いと申せば聊か諂諛の嫌ひが在りませうが左りながらこの両氏の如きは我々共が敬慕する動ぬ魂と濁らぬ心があると云ふこと、諸君は既に両氏が今日に至る迄の來歴を聞かれて最前御承知で在りませう其動かぬ魂こそ其濁らぬ心こそ山よりも高く譽められ水よりも清く評せらる、の物でありますから諸君願はくは臥竜山の如く加茂川の如く高き名、清き評を受け人間たるの面目を旣さんと爲し玉は宜しく須野河村の両氏の行ひを鑑とせられんことを一言御披露致します諸君定めて下手の長談議で無ぞ御欠帥の媒介と成つたでせうが幸ひに許されんことを願ひますト南田氏が演説に一同ヒヤ〜と拍手喝采暫しの鳴も止まずして須野河村両人は大いに面目を施したりとぞ

記者白す此後須野河村の媒介に依りて兩親の許しを受け目出度小竜と結婚を行ひ金川の地を片付けて家族一同東京に到り當時代言の事務を探り又河村も家族を纏めて東京に歸り當時矢張り判事の職に居り双方共に目出度家運榮え行けりとなん

剛膽之書生 結了

明治廿一年八月廿五日印刷
同 年九月十日發行

(正價貳拾錢)

版權所有

版權登錄

大阪府西區京町堀通二丁目卅二番地

發行者 吉田伊太郎

岡山縣備前國津高郡野々口村四番地

著作者 角藤定憲

大阪府東區北濱二丁目六番地

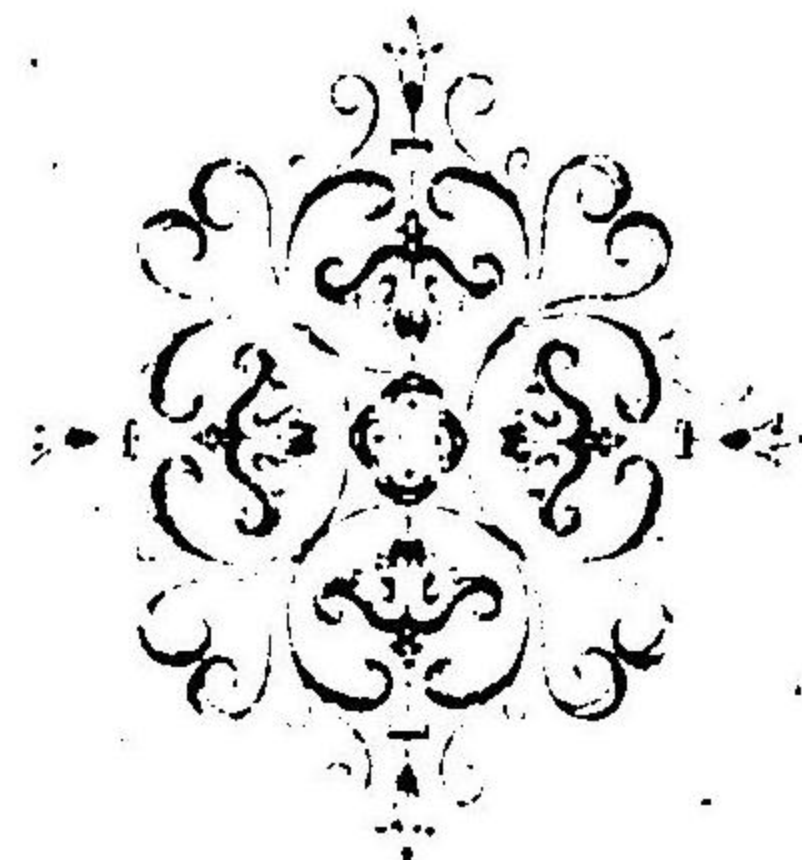
印刷者 阪部清二郎

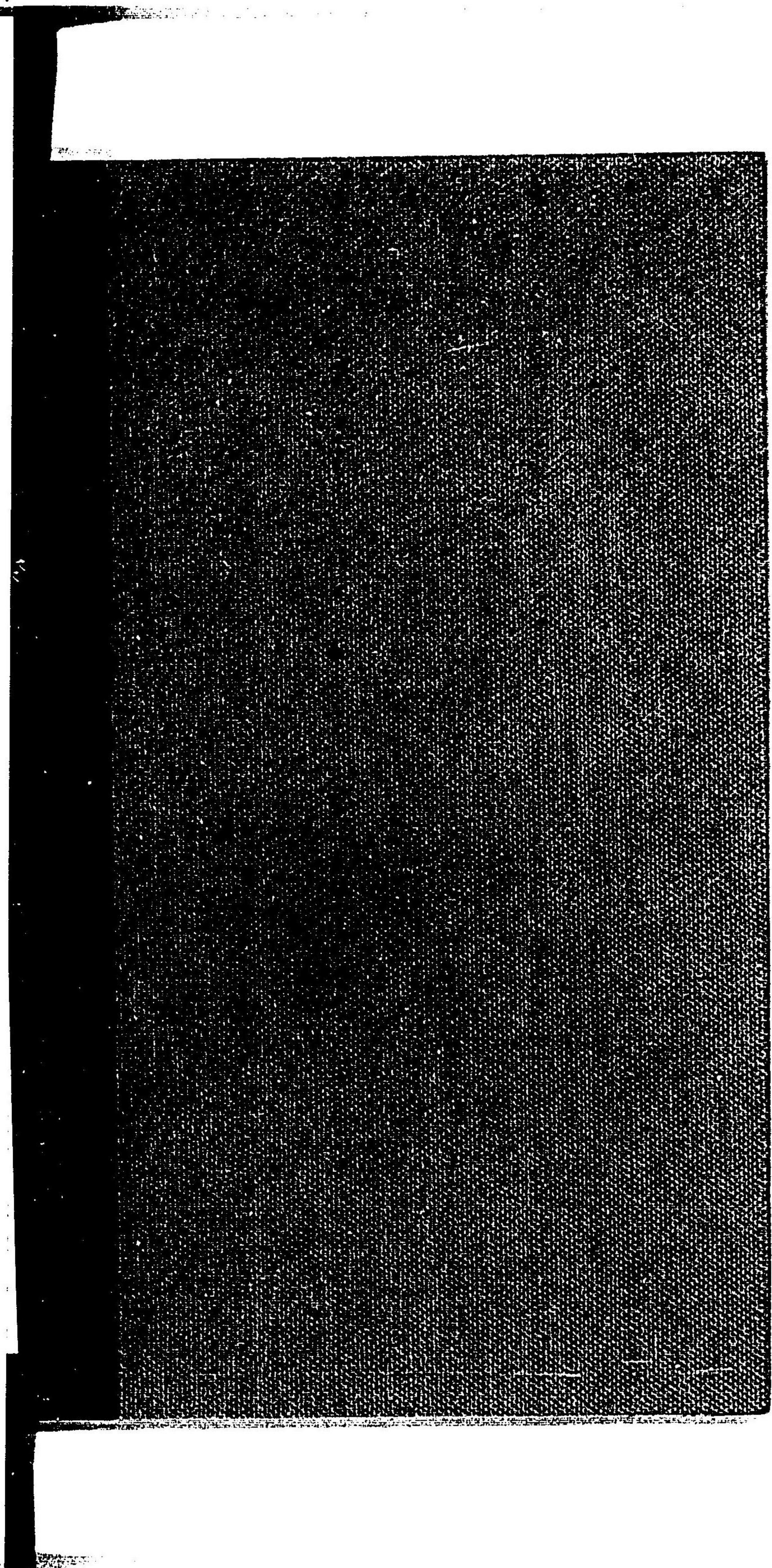
大阪西區京町堀通二丁目三十二番地

發賣所 大華堂

府下大賣捌所

心齋橋筋本町東へ入	岡嶋眞七	同心齋橋筋安堂寺町南へ入	田中太右衛門
同南久太郎町南へ入	安井兵助	同鹽町北へ入	柏原政次郎
同順慶町南へ入	兎尾支店	同南久太郎町東へ入	武田福藏
同安堂寺町南へ入	青木嵩山堂	同北久寶寺町角	三木佐助
心齋橋北詰	駿々堂	同本町北へ入	赤志忠七
同	競争屋	同南久太郎町南へ入	中島徳兵衛
同南久寶寺町北へ入	寶文館	同備後町東へ入	博文分社
同備後町南へ入	此村彦助	南本町三休橋西へ入	大辻増五郎
同	吉岡平助	心齋橋南登丁目	松村九兵衛
同	積善館	京町堀五丁目	平野藤七
同	小谷卯三郎	同 四丁目	吉束書店
同北久太郎町	柳原喜兵衛	高麗橋通浪花橋角	田中萬助
同備後町北へ入	梅原龜七	平野町心齋橋東へ入	黒田書店
同順慶町北へ入	此村庄助	東京日本橋區橋町四丁目	鶴聲社
同	田中恒太郎	同 本町登丁目七番地	東京屋
同博勞町南へ入	中川勘助	京都寺町松原下ル	改進





特10

806

剛膽之書生

国立国会図書館

093663-000-3

特10-806

剛膽之書生

角藤 定憲/著

M21

DBQ-1057

